

第23号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十六年八月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしずく

石川希理

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・短歌・俳句・川柳など）、散文（小説・随筆・児童文学・紀行・評論など）のすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力、援助を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス代表・編集長 大西 亥



目次

ありがたいの内訳	明花	6	
息子	明花	8	
阿倍野友之・石川希理対談		13	
息子	一 えんまもんどー	石川希理	
詩	二編	大西隆史	33
僕と山	胃弱亭骨人	38	
娘の出産	魅華	45	
紫陽花の咲く庭	高阪博一	49	
春の雲	彩華	61	
息子	小野村新	63	
幻影都市	石川希理	68	
編集室から		77	

ありがたいの内訳

明花

「三月×日午前の配達で、荷物を送りました」相変わらず、シンプルなメールが届く。先月、私がプレゼントしたチョコレートのお礼を送ってくれたということらしい。

メールの主はお兄ちゃんだ。実の兄ではなく、幼いころ近所に住んでいた二つ年上の幼馴染みで、今は大手企業の部長さんだ。

公園のブランコに乗りながら、飛行機のエンジン音を聞き分けてか、その時間に飛ぶ機種を知っていて、どこへ行く飛行機かを教えてくれたのは、もう遠い昔のこと。大好きな飛行機に乗って、月の半分を海外出張で過ごす、ちよつとくたびれ始めたザ・ジャパニーズ中年ビジネスマンだ。

高校生の頃に引越してしまっただけれど、大学生になり就職し、それぞれが結婚をしても年賀状

のやりとりだけは途絶えることなく続いていたのだ。再会したのは最近のことで、もう三十年以上の年月が経っていた。

「ピンポン」。

ちょうどお昼ごろに宅配便が届く。伝票にサインをする。懐かしい字。よく勉強を教えてもらっていたので見ただけで誰だか分かる。

忙しい人なのに、わざわざ送ってくれたのかと思うと申し訳ない気持ちになる。開けてみると出張帰りの空港で購入したというジャスマン茶だった。「荷物届きました。ありがとうございます。恐縮しちやいます」と早々にお礼のメールを送った。

ありがたい、は便利な言葉だ。プレゼントをもらって、ありがたい。わざわざ出張先で買って送ってくれて、ありがたい。なのだけだ。

中年お兄ちゃんの二つ年下の私もれっきとした中年女性になっている。

忙しいが張り合いもあつた子育て全力時代も終

わり、子どもたちも就職し、孫の顔はまだ見ないが、いくぶん年上の夫はそろそろ定年を迎える。

夫婦二人暮らしの家事は、五人家族の頃に比べればずいぶん楽だが、その分、老親の病院通いの付き添いや介護の打ち合わせが、子育てと交代でウエイトを占めるようになり、ランチ会での友人とのおしゃべりがリフレッシュという、まさしく、ザ・ジャパニーズ主婦の私。

この宅配便は、モノクロのスケッチにパステルカラーの彩色をしたような出来事だったのだ。ふつ、と「少しは可愛いと思つてもらえる女の子だったかな？」そんな錯覚を感じさせてくれて、ありがとう。

他の人からの贈り物なら、違つた色合いのスケッチになつたことは、心の中にしまつておくことにして。

せつかくだから、食器棚の奥のティーポットで、お茶、入れよう。

ジャスミンの香りは甘い。



特集……息子・娘

三月例会で、今号の特集は「息子」または「娘」のタイトルでということになりました。ジャンル、内容は問いません。掲載場所はまとめていません。該当タイトルと俳句『春の雲』がその作品です。

息子

明花

「わあ、大きい！」

息子にかけた最初の言葉をはつきりと覚えている。体重三九六グラム。身長五二センチ。彼は私の三番目の子どもだ。

いわゆる長男の嫁の私。長女、次女と女の子が続き、私自身は子育ては二人で充分楽しんだ、と思っていた。そこにひよつこり、やってきた男の子だった。舅姑はもちろん、長女を産んだその日「次は男の子を」と言った無神経な夫も喜んだと思う。

男の子だつて女の子だつて、子どもはどちらでも可愛い。育ててみれば性別は関係のないことだ。

私自身は、女の子だけの時は、同じ性別なのに性格の違いで随分、二人を比べてしまった。何事にもおっとりした長女に、しつかりものの妹。なんでこんなに違うのか？ と思っていたが、どーんとやってきた男の子を育てて「個体差」に納得出来た。当たり前だけど、比べるものではないのだ。ひとりひとり違うことに気づかされた。実はそれから子育てがラクになった。

「三人産んで一人前」と、私に何人もの人が言った。「一人前でなくてけっこうよ」と内心毒づいていたけれど、二人の子育てと三人の子育ては本当に随分違う。作業量と言うのか手間と言うのか、比べ物にはならない。

ただ、第一子を育てた「こわごわ」な感じはなく、存分に子育てを愉しもうと腹をくくった。四年半で三人も産んだことは、五十歳を過ぎた今思うと無謀なことをしたな、とさえ思う。それでも子育ては楽しかった。

息子はいつばい母乳を飲み、よく寝て、十ヶ月を過ぎる頃には体重も十キロを超え、私の上腕には見事な力瘤が出来るほど「すすくすすく」育った。

二歳を過ぎる頃には「いつたいいつ、家に入るの？」と近所の方が、私を心配してくれるほど、外遊びが大好きで、夏の朝、目覚めてすぐにお気に入りのお駄を下駄をはいて、虫かごと網を持ってセミ取りに興じる姿に「昭和生まれなら良かったのにね」と何度も私はつぶやいた。

幼稚園の頃、近くの公園の樹を見て「おかあさん、あのきれいな花は何ていうの？」と聞いたことがあった。感慨深げな声は今も耳に残っている。「ねむの木よ」。息子が花の名前を聞くなんてギャップがあった。だから、印象に残っているのだろう。元氣者で公園の枇杷の木に登ってお猿のように実を食べたり、近寄ってきたハトを一瞬で捕まえたり、楽しそうだと思っただとお構いなしに水たまりに足を突っ込んで洋服はドロドロ。体の大きさや行動のダイナミックさと心の繊細などころの差に私は気がついていなかったのだろう。

やがて中学生になり、部活もはじめ、オリエンテーションの実行委員に立候補してみたりと積極的に過ごしている様子だった。

ところがゴールデンウィークを過ぎて、ずつとゴールデンウィークのままになってしまった。学校に行けなくなったのだ。不登校の始まりだった。

いじめかと思つたが、それはまず考えられなかった。学校に相談に行く、と学年主任の先生からも「学校の中を入学当初から、自由に楽しそうに動けていたから、いじめはないやろなあ」と話してくださいました。

しばらくは新しい環境に疲れているのだろうということになり、親の気は焦るものの、本人は動けずの状態が続いた。

同じクラブの友だちは自宅に遊びに来てくれるし、学校の配慮でクラブ活動だけに来てもよい、ということとで土曜日曜は、ときどき学校にクラブだけにいくという生活になった。平日はクラブに行かない。他にいっぱい生徒がいるからだ。

やがてすぐに夏休みに入った。

同じ頃、姑の闘病生活が始まったこともあり、私はフルタイムの仕事を辞めた。朝、息子を起こしたり、たまには自動車で学校に送り届けたりと仕事に出る心の余裕はなかった。「今日は学校に行くのか？」と毎朝がとて重たく、どのように過ごしていたのかはもう記憶にもない。

そのころの私の願いは「お腹の底から、わっはっは、と笑いたい」というもので、晴れた青い空を見上げて泣いていた日もあった。

砂にどんと埋まって、足が前に進まず、胸まで埋まって、もう息も出来ず、ついには頭まで埋まってしまったような感覚だった。

それでも時間は万人に平等に過ぎ、中学生生活を自宅で「三年寝太郎」で過ごした息子にも次の段階に

進むしか道がなくなった。

中学三年の十二月暮も押し迫った頃、三重県の国定公園近くにある学校に見学に行った。

年が明け二月。受験の日、学校北の空が暗くなったかと思うと三十分もしないうちに校庭も校舎も白い雪に包まれ、鹿が数頭目の前を横切っていた風景に目を丸くした。

三月、縁あつて合格通知が届き、制服や備品の購入に息子と二人、初めて電車で学校へ行った。自宅最寄駅からJR環状線「鶴橋」で近鉄に乗り換え「神原温泉口」で下車。学校の送迎バスに乗る。この道のり、いつかは一人で帰省することもあるのだろうか。

三月下旬中学の卒業式に出席。

四月入学式の前日、必要な生活道具を持って移動。神原温泉で一泊。神原温泉は清少納言が『枕草子』で「湯はななくりの湯（神原温泉のこと）有馬の湯、玉造の湯」と謳った名泉。旅行に来ているのだったら嬉しいのだけれど。

深夜「寝られへん」と息子が言う。「お母さんも寝られへんなあ」と返事をした。浅い眠りの中で何度も寝がえりを打った。

私自身の持てる出来る限りの手は尽くしたが、親の手元に置いてはこれ以上育たないと判断し、また息子も何カ所かの高校と名のつく所を見学し、自分の意思で全寮制の高校に進学することに決めたのだ。それでもそれが正しい判断だったのかどうかは分からない。

入学式を終えて帰宅する車の中からは、校門から続く桜が「たつた今、満開になりました」とばかり、一枚の落花もないほど咲き誇り、少し早い山の夕暮れの冴え冴えとした空気のかなで私を見送ってくれてい

た。

胃の下を薄い氷の刃で、すーっと引かれたような切り口も鮮やかな鋭利な痛みを感じていた。桜の花がこれほど胸に迫るものだとはその時まで知らずにいた。

何度も何度も桜の花を見たが、たぶんこれからも春が来るたびに桜の花を愛でるだろうが、あの日のあの桜を超えるものはないだろうと思う。

一年生と二年生の二回、同じ桜を見て、卒業時には桜は咲いていなかったし、遠方で、もうあの桜を見ることはないが、多くの人の力をお借りして、無事に高校の三年間を過ごす事が出来た。大学生の今も自宅に帰らず下宿生活を送っている。

あの三年間はこれから、どんな価値を持つのだろうか。

私にとつては、換え難い時間だったのだろうと思う。空の碧さを知るために白い雲があるように、私の人生には必要なことだった。

「じゃ、もう一度いかが？」と言われたら、丁寧にお断りするけれど。

息子の人生の中の価値は、分からない。もつともつと人生を重ねた後で、聞いてみたいとは思いますが、今はまだその時ではないように思う。

「子どもは三人育てて一人前」

人数ではなく、結局は、子どもに育てられて親になるということなんだろう。



「阿倍野友之・石川希理対談」

本日のテーマは、ライトノベルというテーマです

六月六日居酒屋にて

石川 本日はお忙しいところありがとうございます。

阿倍野 お久しぶりです。

石川 本日のテーマは、ライトノベルというテーマです。

阿倍野 なるほど。そういう文章多いですね。(笑)

石川 若い人と話していますと、ライトノベルをよく読んでいるし、書いている人も多い。私のような高齢者はどうもついて行けない。何故でしょう。

阿倍野 ライトノベルのテーマ、題材は、例えば兄と妹が肉親と知らずに愛し合ってしまう。同じ男性を好きになる二人の女性の心の葛藤。別々に育てられた一卵性双生児の出会い。友情、異世界との

戦い、魔法使いの活躍、異世界転生、魔王、神話、妖怪と、題材自体は小説と変わりないですね。石川 ただ、おっしゃった中で魔法や神話、異世界、異次元といった題材が多い気がするのですが。

阿倍野 そうですね。ライトノベルのはっきりした定義は無いのですが、読者対象が中・高校生の場合が多い。現在は大學生から三十代にまで広がってきているらしいですが。

石川 それで神話や、幽霊や異世界の話が多いわけですか。

阿倍野 携帯小説もそのひとつですが、マンガやアニメ、ネット、スマホといったものの影響が大きくて、九十年代から二千年代にかけて広がってきました。私は若者文化の大きなひとつのうねりと見ています。

石川 うねり、ですか。

阿倍野 ええ、恐らく十年後には四十年代にまで広がるでしょう。それから拡散していくと思います。

石川 若者が歳を取って自分達の文化を引きずっていく。

阿倍野 そうです。ただ、軽妙な文体、掴みの巧みさ、ストーリー展開の早さ、アニメの挿絵といった面白さは、それだけでは人間が成長して経験が深くなるについて行けなくなる。

石川 だから拡散していくと。

阿倍野 ええ、だから高齢者がついて行けないのは当然なのです。むしろ怖いのは、ライトノベルから小説に深化していかないと終わってしまうことです。

石川 マンガやアニメで終わってしまう。

阿倍野 そのとおりです。若い世代にとつてみれば、自分達の生活、感覚が反映されているわけですから、感情移入できるし、楽しめるし、自己確認も出来る。新しい機器を使い、色々新しい知識や仕掛けも知ることが出来る。何より同じ世代との話題性の共有が出来る。ただ登場人物をいろいろ描いていても視点は、若者のそれなのです。価値観も結局は若者のそれで終わってしまう。視点を変えたつもりで大人が出てきても、それは若者から見た類型的なものにしか過ぎない。

石川 深化しないというのはそういうことですか。

阿倍野 残念ながらそうですね。しかし、近年はライトノベルを書く人が大人の小説も書き始めている。もう少しまく橋渡しできればいいと思うのですが。

石川 それは初めて聞きました。

阿倍野 SF作家の筒井康隆さんが「史上最高齢のライトノベル作家」を自称して作品を出すなどしていますから、逆方向もありますね。ライトノベルはキャラクターにテーマ性を依存した小説ですから、面白いのですね。独特の主人公そのものがテーマである。だから二次小説も出来る。たとえば『相棒』というドラマから、その登場人物を主人公にしたスピンオフ映画が作られました。同じ事です。ゲームならおなじみです。トルネコの大冒険やチョコボの不思議なダンジョンといったものはドラゴンクエストやファイナルファンタジーというゲームから生まれたものです。

石川 すると上手く拡散すれば、新しい日本の小説形態になる？

阿倍野 ええ、ライトノベルではなくて、エンターテインメント。つまり私小説主体といわれる日本の純文学が、ライトノベルの掴み、スピード展開、キャラクターを取り入れていくと面白くなる。

石川 それは我々が努力しないとけないと言ったことですね。

阿倍野 そうです。若者は知識が豊富ですし、その意味ではたくさんの知識の羅列が出来る。だが知識の料理は出来ているようで出来ていない。経験・積み重ね、そして知識の昇華といったものがない。ライトノベルを書きながらネットでウイキペディアを見て、色々なアイデアや出来事を組み入れていく。ニュースもネットで見ます。だから世の中の出来事、人の心の羨望、賞賛、嫉妬に基づくような事件も取り入れる。

石川 すると濃い内容になるのになりきれしていない。

阿倍野 少し話題を変えますが、いま日本で一番知識があるのは、東大受験直前の高校生でしょう。ギシ

ギシに知識が詰まっている。東大生も凄いかも知れない。

石川 ああ、そういうことですか。

阿倍野 ええ、もちろん中には、すばらしい知恵を持った東大生もいて、東大教授よりすばらしい業績を

上げるかも知れない。が、そういうレアケース、多分無いと思います。たまたまあつても長続きしませんからね。つまりライトノベルは上滑りになってしまふということですよ。

石川 やはり知識そのものよりもそれをどのように肉化しているかということがテーマの描き方に影響を

及ぼす？

阿倍野 だから、二十代のライトノベル作家が、三十代半ばになって、その書き方の巧みさを武器として、

普通のおかしいですが小説家として活躍している。村山由佳、桜庭一樹の直木賞、うぶかたどう

冲方丁の本屋大賞、佐藤友哉の三島由紀夫賞、小野不由美の山本周五郎賞などですね。

石川 冲方丁の『天地明察』を映画で見ただけです。お恥ずかしい。

阿倍野 吉川英治文学新人賞、本屋大賞を受賞して、直木賞の候補となっておりますね。ライトノベルらしい

キャラクターの描写や読みやすい文章といわれています。暦を訂正していく天文学者の生き方を「どんなに挫折しても夢を追い続ける主人公の姿」を描いたと冲方丁さんは書いていますね。そのテーマを面白く、しかも人間性にまで深く、それを紆余曲折のあるドラマとして書いているのです。ようか。

石川　すると若いライトノベル作家が三十代になって、時代に合った作品を描き出した。それは中高生などのライトノベルファンにも受け入れられている。

阿倍野　そこが少し難しいところで、もちろん読みやすいのですが、これは従来の小説が読みやすくなって、拡散していると思います。ですから、読み手は増えるでしょうが、いわゆる若者向きのライトノベルではない。

石川　としても、テーマを深く捉えて訴えていくエンターテインメントが普及してくるということはすばらしいこと。

阿倍野　その通りです。いままで読まなかった人が読み出す。

石川　それは、いわゆる日本の文学構造を変えると。

阿倍野　長いスパンで考えると、そうなるでしょう。芥川賞、直木賞、いわゆる純文学と大衆小説、その垣根は低くなっていますからね。渾然一体化し、やがてライトノベルもそこに入ってくる。それは表記表現の仕方が入ってくるとともに、テーマやあらゆるジャンルも流入してくるでしょう。

石川　純文学という方がいいようが妙ですね。

阿倍野　妙ですね。(笑)

石川　文学とか私小説とか、純文学とか…。

阿倍野　文学は明治時代に英語などが翻訳されたときに、生まれました。まあ「哲学」とか「宗教」とかもそうです。概ね妥当だと私は思います。ただ、それに携わっていない人が、文学ときくと「文による学問」になって、違和感がありますね。私小説というのは、我が国の近代小説にみられたもので、

作者の直接経験を素材にして書かれたものです。それが主流になつて、暗く陰鬱で、うだうだとして、という形式が小説の主体になりました。人生の苦の側面を書かないと軽くなつてしまひ読み手にインパクトを与えられないことが問題ですね。だから、性がやたらと、それも近親相姦だとか、屍姦だとか、子どもが暗鬱に親のそれに気づくといった、おぞましいものが取り上げられます。

石川 恥ずかしいですね。私のエスブラネードもそうですね。

阿倍野 私小説ですね。でもあの作品集には「カオルと太郎」といつたSFもありますね。そして最後がどんでん返しになつていて、思わず感情がぐつと高まつて引き込まれてしまふ。それはあなたの中に、私小説というパターンだけで無く諧謔性、また読み手を楽しませるエンターテインメント的要素があるからです。

石川 でも、「わたくし小説」を書こうとしている。

阿倍野 気づかないうちに私小説を意識しているということでしょう。一旦衰えたりもしましたが、小説は私小説、それこそが「純」文学という意識が生き残っていますから。でもあなたの小説は社会的なシステムとの接点も多い。我が国の私小説の場合、完全に個人の世界に入り込んだだけのものが多いのです。

石川 それは変わりつつありますか。

阿倍野 ええ、通俗性を問題視する方もおられますが、やはり、読み手がただ心理を抉られるだけでなく、共感して物語に入つていけないとね。もちろん純然たる私小説もあつていいのですよ。ただ振り

子が振れすぎていたというべきでしょう。その意味で、ライトノベル的手法が入るのはいいことなのです。多様性を取り入れ保持し続けることが大切ですね。

石川 そうしないと若い世代が入られない。

阿倍野

そうですね。ゲームやネットや、スマホなどのリズム・明瞭・おもしろさ・短さという世界を上手く取り入れていくことが文学を創造し続けることにつながると思います。ポイントは上手くということ、テーマの消化の軽さというライトノベルの欠点を入れてはいけないということです。入れるとよく売れてよく読まれますが、一過性に終わってしまい、何も残らない。それが怖いですね。

石川

今日はお忙しいところありがとうございます。

阿倍野

いえいえ、またやりましょう。



息子　　ーえんまもんどー

石川希理

龍一は寝台の上に起き上がって辺りを見回した。

小部屋だった。細長い八畳ほどのコンクリートの壁に囲まれ、入り口に鉄製のドアがあつた。天井が五メートルほどあつて高く、ドアも宴会場のように四メートルくらいある。ドアには二メートルくらいの位置に小さなのぞき窓と、下部には犬の出入りするような開口部がある。どちらも鉄の格子があつて外から蓋が垂れていた。反対側には、はめ殺しの五十センチ角ほどのガラス窓がある。曇り空からの光が茫洋と漂っている感じだ。

天井には、はめ込み式のエアコンと、スプリングランプ、警報装置、そして多分LEDランプの四角い照明器具が沈黙している。

照明器具の横に、こたつ大くらいの丸い暗い塗装がある。天井に塗つてあるのか黒いプラスチックのカバーなのか、底知れない穴の入り口のように見えなくもない。遠くに小さな光の点が瞬いているように見える。

見上げていたら首が痛くなる。

遠い昔、見たことがあるような気がする、吸い込まれそうな漆黒の穴だ。

龍一は天井から視線を戻した。

白いカバーのかかった薄い毛布が足下にある固定された寝台の上で、龍一は一点に釘付けになつた。

横に小さなテーブルとイスがあるので見過ごしていた。部屋の隅に便器がある。傍らには小さな洗面台とかがみもある。

「留置所」と口の中で言葉が反響した。実際に入つたことはなかったが、テレビや映画で見る警察の留

置所か刑務所の部屋みたいである。おまけに入り口側の天井隅には監視カメラがあり、横の壁にはスピーカーらしきものはめ込まれてついている。

頭を捻った。

東京都内の月の家賃百九十万円の高級マンションにいたはずだ。コンシエルジュがいて警備室もある。二百五十㎡は一人には少し広すぎたが、友だちや女を連れ込むには適当だった。

「えつと、仁美かな……」

モゴモゴと口を動かした。昨日は昼から取締役会が小一時間あり、四時頃からバカラ賭博をしていた。二百万ほど負けたが面白かった。八時頃からクラブの女と食事をして、マンションへ連れてきたはずだった。名前をよく覚えていないが、大柄な美人だった。

―寝たのはいつ頃だったか……

ソファで飲んでいて、果たしてベッドにいつたのか、着替えをしたかもよく覚えていないが、今は灰色の

綿のジャージみたいなのを着ている。

着ていたスーツやワイシャツなどは、便器の横のイスにかけてある。靴も揃えておかれている。

―夢でもなさそうだ……

龍一はまだ三十半ばだ。頭も身体も悪くない。まあバカラ賭博はよくやるし、酒も飲む。酒は『響』の三十五年ものとか、シャトー・オーゾンヌ2002といった種類で、あまり深酒はしない。

ゆっくりベッドから降りて、置いてあったサンダルのようなものをはいた。

ブリオーニのダブルブレストスーツを取り上げてみたが、財布もスマホもそのままである。小さな蛍光灯のある机の上の、腕時計を取り上げてみた。七時半過ぎだ。いつもは九時過ぎに起きるから早すぎる。ため息をついて、ゆっくりとネジを巻いた。毎朝このジャガールクルトのネジ巻きは気持ちいい。落ち着く。

かがみを覗き込むと、ヒゲが薄くのびている。こ

こが何処かわからないが、気持ちが悪い。驚いたことにかがみの前の小さな棚には、カミソリと石鹸があり、タオルもかかっている。

普段は電気シェーバーなのだが、さすがにそれは置いてなさそうである。

― 刑務所でもないか…

龍一は水道を捻って生暖かい水に石鹸を浸し、カミソリを取り上げ、ゆつくりとヒゲを剃り始めた。

かがみやタオルやヒゲ剃りなど、留置場などにはないはずだ。

今朝の十一時から、経団連の会合があったが、それはどちらでもいい。午後からは自家用ジェットでラスベガスにでかける予定であった。もう相当負けているのを取り返したい。

― なんだここは

状況がわからないのが少し歯がゆい。

ヒゲを剃り終えて、口をゆすぎ顔を洗った。ロー

ションも何も無い。タオルを取り上げると随分薄い。『NM』と文字が刷り込まれている。汚れてはいない。

顔を拭き終えて手ぐしで髪を整えると、イスにかかっている服に着替えた。昨日着てたものを今日も着ることになるとは思わなかった。気持ち悪いが仕方がない。まさか綿のジャージ姿で龍一が人前にでるわけにはいかない。

着替えてから、鉄製のドアに近づいた。

「誰かいるか」

小さくいった。マンションならこの時間になるとメイドが来ていて、朝食の準備などをしているはずなのだ。

自宅ではないのがはつきりしているが、誰かいるはずだ。

だがドアの外はシンとしている。

ドア窓の位置が高い。一メートル八十の龍一が背伸びしても届かないが、今度はそこに向かって叫

んだ。足りずに鉄製のドアを叩いた。

ドアのひびきがおさまると、重い足音が遠くからきこえてきた。ドスンという何かをコンクリートに叩きつけるような物音もする。

龍一はドアから離れて、窓際に後退した。

物音はドアの前で止まり、何かを外す音と同時に大きなドアノブがぐるりと回った。

「あらら」

冷たい風とともに入ってきた足を見て、ゆつくりと視線をあげて、龍一はそういつたまま固まった。心臓も音をたてたのを忘れたようだったが、あまり驚きがないのが不思議だった。

目の前には青鬼がたつていた。

マンガかアニメ、雑誌などでしか見たことがない。背は三メートル近かった。

「うるせいでごんす」

野太い声が出た。毛深い手足。虎皮模様のパンツ。

確かあのパンツの中には物入れがあつて、鉄棒を如意棒のようにしまえるのである。龍一はそんな風に何かで読んだ気がしていた。

「なんでごんす」

「こ、こは」

声が少し引つかかったが一瞬入った肩の力は抜けていた。

「ここは希望の家でごんす」

「希望の家？」

「そう。ここは地獄の出入り口正門ゲート横、希望の家。三島龍一は目出度く死んでここにいるでごんす」

「ば、ばかな」

龍一は少し身を引いた。だが確かに目の前には青鬼がいる。

「死んだ……」

少しその言葉を飲み込むのに時間がかかった。だが、呼吸もしているし、心臓も動いている。

「向こうの世界では死ぬと呼吸がとまるでござんす。しかし、地獄でも呼吸をしないと食べ物も燃焼してエネルギーにできないからやはり死ぬでござんす」

青鬼はニヤリとしていった。

「で、どうなるんだ」

龍一は動揺していない自分に改めて感心しながら口を開いた。

龍一の父親三島治は日本一の製鉄会社の株式を十%、超高層ビル群と数万戸のニュータウンを三つ所有していた。造船やエネルギー関連の有力者でもあつた。龍一も東大からハーバード大学の経営学修士号をとり、三十歳半ばにして日本最大の3M不動産の社長におさまっている。贅沢も女遊びも三、四年充分にした。権力もあつた。だが退屈だつた。四十歳になれば政党を作つていずれば総理になってやろうと考えていた。だが死んだらしい。博打の片はついていないし、政治家の夢がなくなつたのは残念だつたが、さほど執着していなかつた。結

婚もしていないし当然子孫も残さなかつたが、それも意識にのぼらないほど関心がなかつた。それより、老化も経験せず、そして苦痛もなく死んだことの方がよかつたのかも知れない。

「八時三十五分から五十五分までの間、えんま大王さまの裁きがあるでござんす。その結果がでると、すぐにでかけるでござんす」

龍一は案外人のよさそうな青鬼の顔を見ていた。地獄の裁きといつても、そう悪いことをした覚えはない。遊びはしたが、人を騙したこともなければ殺人も強盗もしていない。むしろ慈善団体に寄付をしたり、従業員の給料をあげてやったこともある。

※

えんま大王は、うらなりのような顔をしていた。ただ青鬼よりずっと大きくて奈良の大仏さんくらいあつた。当然法王庁は新国立競技場ほど大きかつた。何でも死人の数が加速度的に増えて、えんま

大王の有資格者を五万人まで増やした。大勢の待つ控え室から巨大な法廷に入る。

「名前・住所・性別」

うらなりえんま大王は、面倒そうに平板な声をだした。

「ぼくは地獄で裁かれる理由がない」

「名前・住所・性別は」

「ぼくは悪いことをしていない」

「たずねられたことを答えないと地獄に戻すぞ」

うらなりえんま大王は、青白い顔で頬がこけて、目の縁に隈がある。あとから青鬼にきいたところでは、極楽から成果主義が強調されて、残業続きなのだそうだ。

龍一はここは温和しく答えることにした。

「よしよし、では次に、殺生・偷盗・邪淫・妄語・飲酒を認めるな」

うらなりえんま大王は、うつむいたまま、書類を見つづぼそぼそ呟いた。

「は」

「は、ではない。殺生・偷盗・邪淫・妄語・飲酒だ」

龍一は邪淫・妄語・飲酒は少し反省していた。結婚してないから妻以外の女性と関係をもつてはいけないという邪淫は法的には当てはまらない気がした。しかしまあ女性関係は派手だから、仏教ではまずいかも知れない。妄語は「うそ」だから、これは当てはまる。しかし嘘のない人生は考えられない。「ごくろうさん」なんて、苦労していなくつたつて挨拶である。「よく似合っている」とか「お元氣そう」とか「お前が好きだ」なんて、これは外交辞令だ。「嘘も方便」というのは仏教から来ているときいている。だからこれも少しはいけないかも知れない。飲酒はこれはもう毎晩である。といって罪ではないだろう。だいたい僧侶自体が酒はよく飲む。そういうことから考えると、邪淫・妄語・飲酒は、地獄に該当するほどの罪を犯しているとは思えない。「殺生や偷盗はしておりません」

龍一は、よく通る声でいった。

うらなりえんま大王は、顔もあげずに「本当に」と投げ捨てるようにいった。幾分嘲笑のひびきも含まれていた。

「まさか……」

龍一は喉を動かした。そんなことは絶対にしていない。

「していないというんだな……」

うらなりえんま大王は顔をあげて細い目を龍一に向けた。

龍一の背筋がぞくりとした

「殺生と偷盗だぞ」

「はあ……」

龍一は曖昧に返事しながら、なんとなくくまずいという感覚が心にわつと広がるのを知っていた。

うらなりえんま大王は続けた。殺生をしていない人などこの世にいないといった。

「よいか」

うらなりえんま大王はゆつくり上半身を起こした。大仏のような身体が持ち上がると、龍一は押しつぶされるような気がした。

人の身体は六十兆個の細胞からなり、さらにその中に大腸菌のような微生物が千兆個もある。それが瞬間瞬間に生まれ死に、白血球は細菌を食い、壮絶な戦いを続けている。その刹那の消滅が連続して人は生きている。それだけでも殺生をしていない人など存在しない。その上、人は生きる上で、蚊を殺し、ゴキブリを叩きつぶし、歩いているうちにありや微生物を踏みつぶす。殺生をしない人など存在し得ない。

「あ、いえ、殺生はしたかも知れませんが、人殺しは」

「だまれ」

雷のような声がひびいた。

「生き物に別などない。何処でどのように人とその他を分けるのじゃ。人だけが貴いなどと思ひ上がる

な」

「は、はい……」

龍一は口を噤んだ。昔、東大時代に三木清か、西田幾多郎か、中村元か、梅原猛か、スマナサーラか、速水脩かで読んだような気がする。

「いや、ローレンス・スクラウスかな」

「偷盗とても同じことじゃ」

うらなりえんま大王は続けた。人は生まれて以来、言葉も動作も考え方もなにもかも人の真似をして人となる。その意味では泥棒をしていない人はいない。ただ、金にこだわって、金に換算できるものを盗むことのみを「偷盗」という。地獄ではその考えは通用しない。

「殺生はわかりませんが、偷盗はいくら何でも、意識しない子どもから大人になるときの人の真似まで含めては」

うらなりえんま大王の口がぴくりとした。

「なるほど、いい過ぎじゃというのだな。では、金は盗

んでいないか」

「まさか……」

「ほう、そうか」

「人のものを盗んだことなど」

「ないというか」

うらなりえんま大王の声が龍一の心を踏みつけるように降ってきた。

「ない、はず……」

龍一はそれでも否定した。泥棒などしたことはない。

社長の給料は年に一億二千万だが、これは連結従業員総数一万、資本金一千四百億の企業としては少ないくらいだ。我が国の経営者はおおよそ従業員の十七倍ほどの給料を受け取る。アメリカなどの四百倍などと比べると、日本の経営者は控えめだ。それが格差を生まない国としての秘訣でもある。

「しかしまあ、マルクス流にいうと、労働者が産み

出した剰余価値を収奪していることになる。だが経営という責任ある仕事の対価を得ているだけで、暴利を貪っているわけではない。

龍一は頭の中でそう理屈づけしていた。

格差のない国の経営者。実際は、もうとつくの昔に、アメリカなどよりゆるやかに格差は拡大し、ガチガチの既得権社会が出来あがっている。金持ちの子は金持ち、有名タレントの子は有名と決まっているのだ。もちろん少しだけ、自由の枠は空けてある。龍一にとつては給料は小遣いみたいなものだ。株主としての収入、預貯金、各国の国債、不動産と、資産は二百億はくだらない。両親、兄弟、親族に名義は分散している。カナダとニュージーランドに土地と別荘がある。アメリカのフィラデルフィアには高層ビルを所有している。基本的に我が国が沈没しようと、経済が破綻しようと、困ることはない。確かにトマ・ピケティの「二十一世紀の資本論」のように世襲財産資本主義からみればそれが労

働者からの「偷盜」ともいえるが……。

龍一はその明晰な頭脳に微かな不安を覚えた。ここは地獄である。科学的唯物論者の龍一から見れば信じられない地獄である。経営者は利潤を投資に回しより大きく経済を発展させているなどと、えんま大王に人間界の理屈で反論しても仕方がない。

龍一の能力は抜きんでているが、確かにコンビニで働く若者の十萬倍の資産には不安定さがある。「すべての面で私は罪人です」

龍一ははつきりと答えた。うらなりえんま大王の心証がよくなるだろう。

「よしよし……、わかりがいい」

予想どおりうらなりえんま大王は少しのけぞりつつ優しい顔になった。

「では、刑罰をいい渡す」

「は、いえ、それは」

「なんじゃ、まだいいたいことがあるか」

「殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒は認めますが、罰せられるほど悪いことをしたとは私は思いません」

「なるほどな、では、これを見よ」

うらなりえんま大王がいうと、大法廷の横にいて記録をとっている鬼がなにやらボタンを押した。すると大王の横にあった水晶玉のじょうはりのかがみから銀色の光がのびて、龍一の目の前に映画のスクリーンのような画面が現れた。

リストラを命じた結果、誅首されたもの、その家庭の崩壊する姿。しかりつけた部長が部下の課長にあたり、その課長がさらに下にあたり、そのものがノイローゼになる姿。危険なアフリカの国に、十分な情報と部下を与えられず投げ出された社員。高価な品物を与えられた女が、身を持ち崩す姿。孫請けの社長が首をくくる姿。製造した超高張力綱で作られた潜水艦が破壊されて死者をだす光景。

しかし、そこまでいわれても……

うらなりえんま大王はニヤリとした。

人はすべて世界と関わって生きている。生きることは傷つけ殺すことなのだ。そこから逃れる術は、結局涅槃でしかない。

「死ねということですか」

「いや、生き続けよということじゃ」

「それでは、罪を作り続けることになる……」

「生きることは苦、そして罪を作り続けることでしか生きられないことを知ることがだいじじゃ。その中で人という生き物として精一杯生きることが、自分と相手と世の中のために善く生きようと努めることが、たいせつだと思わぬか」

「しかし罰として生きることなど」

「罰ではない、生きていく上での苦しみは涅槃につながる」

うらなりえんま大王の顔が柔和になった。

龍一は奥歯をかみしめた。まあ、女遊びと、酒と博打。している間は楽しいが、心の隅に穴が開いて、

いつも底抜けの闇がそこに屈んでいる気がしないでもない。悪いことをした覚えはないが、そうかといって仁者のような生活でもない。金も権力もあり、これから政治家にでもなろうかと思っている。

― まあ、政治屋だがな

内心苦笑する。

少しは生き方を改めていけということだと龍一は思った。

― 博打と女遊びはやめて天下国家のことを論じる政治屋になるか

幸い、金は十二分にあるし、巨大企業グループの御曹司でもある。地獄におちなくても済むくらい「よい」生き方はできそうだった。

― ハーバードまで卒業したおれが、地獄のえんまに説教されるとはな

ため息をついた。

「では、戻るがいい」

それで審判は終わった。

※

希望の家という牢獄に戻ると、青鬼がいった。

「では、早速戻るでござんす」

「えっ、すぐに」

「そうでござんす」

龍一は慌てた。

「ど、何処に……」

青鬼は頭の上を見た。

照明器具の横。こたつ大の底知れない穴の入り口のような部分。既視感のある吸い込まれそうな漆黒の穴だ。遠くの小さな光の点がかすかに揺らめいている気がした。

「あれは……」

龍一はゴクリと喉を鳴らした。

「三兆光年先、普通ならブラックホールを二千ばかり通過しないとたどり着けない」

「そこに戻るのか、私のいた世界ではないのか……」

青鬼は龍一に答えず目の前に立ちふさがると、

毛むくじやらの腕をのばしてきた。なにせ背は三メートルほどもある。プリーオーニのダブルブレストスートの襟首を掴むと持ち上げた。龍一は七十キロ近いが、青鬼は横幅だけでも現在の横綱白鵬の倍ではきかない巨人である。

「では、さよならでござんす」

「な、何をする……」

青鬼の腕がさがり、いったん、身体が斜め下に降ろされて足がついた瞬間、ぐいつと上に引きあげられた。

龍一の身体は空気を押しつけるようにブンと音をたてた。

龍一の息が止まり、目がぐるりと回った。

※

マンシヨンの天井の灯りが飛び込んできた。

お気に入りのイタリア製、十灯のシェードシャンデリアだ。ルビーレッドが回りの空間をかすかに染めている。

龍一はスーツ姿のまま、ソファに横になつていた。そうすると夢を見ていたのか

龍一はソファからゆつくりと身体を起こした。

見慣れたマンシヨンの部屋があつた。

仁美とかいった女は帰つたらしい。

「ふっ」

龍一は笑い声をため息とともに吐き出した。

「ばかな夢を見たものだ

そう思いながら、なんとなくひやりとした。

※

青鬼は亡者を追跡するえんまかがみを見ながらため息をついた。

「ワシントン、どうした」

相棒の鋭い目をしたジェファーソンがたずねた。

「ばかな男でござんす。自分の住む世界が本当の地獄だとはいまだにわからないでござんす」

「いつものことじゃないか。亡者は自分が地獄にいると気がつかない」

「しかし、あと二千回もあそこで生まれ変わるでござんす」

「あの男は、東大からハーバードをでて頭はいい。しかし大金持ちの長男ではないか」

「それがどうしたでござんす…」

「総領の甚六さ」

「総領の甚六？」

「ああ、長男のことだ」

「甚六でござんすか」

青鬼ワシントンは、ふーつと、もう一度大きなため息をついて、えんまかがみをパタリと閉じた。

甚六とは「はなはだしいろくでなし」のことである。

了



詩 二編

大西隆史

瑕

瑕を抱えている

わたしたちはいつも

癒しよしの無い、しかし癒しを渴望するそれを

誰かに触れる

わたしの距離とあなたの距離を重ねさせて、直接

目の動き、唇の震え、うなじのなだらかな曲線を感じながら
触れる

そんなことをしたのは一体どれほど前だったか

記憶にざぶんと浸り

物思いにふける

世界は狭くなった

どこにでもヒトが溢れていて
誰もが電脳世界に入り浸り
必死に他者と繋がろうとする
この世界で活発な、活発なこの世界になじめない人々は
瑕を抱えて沈み込んでいく、深く

セリヌンティウスとメロスのような、とまではいかないが

友達という言葉はすいぶんと趣旨を変えた

がんじがらめの日常は

わたしをニンゲンから引き離し

どんだん、どんだん、希釈する

溶けていく

わたしはワタシタチに

薄く薄く薄く

膜が貼られたようなあなたは

目の前に居ても、どこか遠くに居るようで

充実しているというあなたの、背中にある瑕にさえ

わたしは触れられないのです

まっしろなせかい

「Dementia」という言葉は

いつの間にか「認知症」になり

日本中から「痴呆症」の人は居なくなってしまうた

「Schizophrenia」という言葉は

いつの間にか「統合失調症」になり

日本中から「精神分裂病」の人は居なくなってしまうた

「子供」もいつの間に居なくなり

「子ども」がいそいそと遊ぶようになった

「平等」と「優しさ」を掲げ持った人たちが
貼付けた笑顔と

優越感にまみれた拳で潰してしまった「彼ら」
彼らはどこへ行ったのだろうか

「平等」と「優しさ」を掲げ持った人たちが
次なる目標を探して歩いていくその後ろ

残された「彼ら」は助かったと安堵するのだろうか
助かった

なにか？なにを？

「めくら」も「かたわ」も「つんぼ」も「きちがい」も

「乞食」も「ルンペン」も「土方」も

全部きれいに居なくなつた世界はさぞ綺麗なはずだろう

綺麗に繕われたカーテンの裏

のぞいてはいけません

編集室(注)

※不適切な表現が含まれていますが、言葉の言いかえで実際の人権無視は続いていく、社会の暗部が蓋をされてしまう、という作品の趣旨からそのままにしてあります。ご了承下さい。

※「嫁」「家内」「姑」といった文字は、漢字が生まれた頃の性差別をそのまま表したものです。代替する言葉が無い場合もあります。その意味を十分に理解して、差別がなくなり、新しい表現が生まれていくといのですが、染みついた意識はなかなか変革は難しいようです。

※「老人」は「高齢者」になりました。本来尊敬の意味あいもあつたようですがなくなりました。「長老」や「若年寄」「老中」「大老」は死語です。ねえ。

※印度のガンジールは不可触賤民を「神の子」と呼びましたが、カースト制度は否定されずそのままです。アンベードガルは不可触賤民をヒンドゥー教から仏教に改宗させました。仏教にはカーストはないからです。しかし現在一千万人とも言われるこれらの人びとは「新仏教徒」と呼称されて新たな差別の対象になっています。

※言葉は「言霊」「言魂」です。同時に物事を縛り付けてしまっています。西周が、「芸術」「理性」「科学」「技術」「宗教」「主観」「客観」「概念」「理性」「感性」「演繹」「属性」と、新しい訳を作り出しましたが、すばらしいものも多い反面、欧米の事物の概念とかけ離れているというケースもあるようです。

※パワハラ・セクハラ・アカハラ・マタハラなどとハラスメントくつつけた和製英語の多いこと。人権と言葉と、社会でのありようと、私たちは常に自分で学び吟味し続ける必要があります。

「僕と山」

胃弱亭 骨人

のランニング人生で本当に充実した一年となった。

しかし、好事魔多しとはよく

六十三才から本格的に取り組んだマスターズ陸上。四年目となる昨年度は、ハ〇〇mに的を絞り練習に励んだおかげで、京都・大阪・奈良の各大会を制覇し、その勢いをかって出場した十月の「国際ゴールドマスターズ」では、強敵の不在と、ライバルの故障とが重なって運良く念願のメダルを手にし、憧れの表彰台に立つことができた。その結果二〇一三年度の「京都府スポーツ賞」を知事から頂くという栄誉にまで恵まれた。退職後

言ったもので、三月のスキーでひいた風邪が長びき、シーズンの総括とも言える「篠山マラソン」では、練習不足がたたり、第三関門をもクリアできずに回収車に乗ってゴールへ帰還するといふ、これ又僕のランニング人生で初めての屈辱を味わった。そのせいもあつて、それ以後ずっと体調不良が続き、トラックシーズンに入ってもまともな練習もできないまま悶々とした日々を過ごしていた。

そんなある日、ランニング仲

間の一人から近郊の山歩きに誘われた。京都に移ってからと言うものは以前のような六甲の

山歩きも途絶え勝ちになつていた僕は、久しぶりの山歩きにワクワクをして、眩しい新緑の中、初めての栗東市金勝アルプス（りっとう こんせい）に快い汗を流すことができた。そしてここ数年来はマスターズ陸上に専念するあまり、すっかり忘れていた山歩きの醍醐味を味わい、若い頃に僕の心を捉えたあの「山」への思いを新たにすることができた。今振り返ると、ぼくのランニング人生の原点も、若い頃の山歩きにあつたのではないかと、改めて思った次第であ

る。

夏が来ると思い出すのは、若い頃夢中で登った信州の山々である。今でも年に一、二度は登山とまでは行かないが、妻と一緒にバスに頼って軽い高原のハイキングぐらいは続けているが、あの頃のあの感動は年とともに薄れつつある。しかし、梅雨が明け、夏空にくつきりと稜線を描く京の山々を見ていると、もう一度あの岩にすぎり、天の真中に立ちたいという山へのあこがれが入道雲のようにふつつつと湧き上がってくるのだ……。

僕と山について語る時、どうしても僕の故郷「神戸」について触れなければならない。神戸と

いう町の魅力、それは言うまでもなく山と海である。海から眺める神戸の町並みは、東西に連なる六甲山の緑の屏風を背に難壇の如く立ち並んでいる。その六甲の西端の山裾が海になだれ込む「須磨浦」の地に僕は生まれ育った。子供の頃は学校から帰ると毎日のように日が暮れるまで裏山で遊んだことを思い出す。

日本の大都市の中で神戸ほど山の近い町はないであろう。東京都民は休日になるとこぞつて小一時間電車に揺られて「高尾山」までハイキングに出かけるという。大阪市民はどうか、梅田や心齋橋での買い物つ

いでにちよこつと山へと言う訳には行かぬであろう。息子が住む名古屋に至っては、休日家族で一体何処にハイキングに出かけるのだろうかと心配してしまう。それに比べ神戸の町はどうであるか。三宮や元町で買い物帰りにふと山の空気を吸いたくなれば、ポケットの残り少ない硬貨をまさぐるまでもなく、ものの三、四分も歩けばたちまちにして陽光遮る木々の深い緑と、岩を浸して静まりかえった溪谷が目に入る。「新神戸」駅のすぐ裏手の「布引」一帯は正

にビジネス街の延長で、言うならばインスタント深山幽谷の地である。こんなに山深い雰囲気

がこれ程都心に近い所で得られる町を他に知らない。今僕が住む京都でも、町中から「八瀬」や「清滝」といった幽谷の地に入るには、いくら僕の健脚をもつてしても散歩がてらにというわけには行かないのである。

僕は若い頃暇を見つけては独りでよく諏訪山から布引にかけての一带を散歩しながら、神戸に住む幸せを噛みしめていた。又、夏休みは決まって一度は、吹き出す汗を冷たい清流で洗い流す快感を味わうためにだけわざわざ炎天下の六甲山に登つたものである。この神戸の街の特性は旅行する度にいよいよ際立つて感じられる。旅を終え東

から列車が神戸に近づくにつれ六甲の山並が車窓いっぱいに迫ってくる。その黒々とした山塊を這い上がるように町の灯が輝く光景を目にすると、「ああ、神戸に帰ってきた。」という感を強くしたものである。

こんな神戸の街で、山を遊び場としてきた僕が一步成長して、本格的に「山」というもの意識しだしたのは大学に入ってからのものである。それまで僕は山というものを改めて意識するまでもなく常に身近なもの、生活の一部として捉えていたわけである。その山という自然の持つ魅力を自分の内にはつきりと知つたのは、大学二年の夏であつ

た。それは同時に「山」というものに共鳴しうるだけの情操が僕の中に育つてきた時期でもある。それは正に思春期を迎えた青年が異性を求めるが如くごく自然な成り行きであつたと言えよう。僕は性に目覚める勢いで美しい女性にも勝るべき存在としての「山」と邂逅したのであつた。

その年の夏休みに僕は学友達四人で信州を旅した。当時徐々に募りつつあつた山へのあこがれが当然の如く旅の目的地に信州を選んだ。それはあくまで僕個人の希望であり、友人たちはどうであつたか、その真相はわからないが、とにかく友の賛

同を得るや僕はすぐ計画にとりかかった。山への思慕が計画を一層スムーズに仕上げ、旅費を稼ぐアルバイトも苦にならなかつた。

昭和四十二年八月二十五日、我々は残暑厳しい神戸の町を後に一路信州へ旅立った。僕達の乗った列車がやがて名古屋を離れ、中央本線を上つて行くにつれ、山はいよいよ深くなつて行つた。「木曾路はすべて山の中である。」という有名な一節を思い起こさせる風景が車窓に広がった。眼前に迫る深い山々は、瀬戸内の扁平な自然を見慣れた僕の心を踊らせた。黄昏どき我々はひやりと肌寒い長野

駅に降り立つた。そこから善光寺を振り出しに、大自然を求めて五泊六日の信州の旅が始まつた。

志賀高原で初めて白樺の木を見つけた時の感動は今でも忘れない。今振り返ると実に無邪気なことに思えるが、生まれてこの方、山といえは六甲山しか知らず、ただあこがれだけで何の知識もなく、およそ山に入るに似つかわしくない都会人そのままの格好の僕の目に、それは高原に棲む白い妖精の如くに映つた。白樺という木は高原にはなくてはならぬ、正に高原のアクセントであると思う。その木々に囲まれ眠る緑深き池。そし

て高原特有の乾燥した空気。それらはそこに佇む僕を増々感傷的なものしたのであつた。

草津の白根山しらねさんを訪れた時は生憎の天候だつた。歩行を阻む烈風と肌をささず冷気、濃霧の流れにのつて激しく匂う硫黄の臭気、荒涼とした山肌に白骨化して林立する木々、それらは全て人間共を厳しく拒まんとする自然の荒々しい姿であつたにもかかわらず、妙に僕の心を陶醉させずにはおかなかつた。強風に舞う砂塵をまともにも受けながら、やつどの思いで火口壁にたどり着く、と同時にガスの切れ目から一瞬覗いたエメラルドブルーの湯釜に思わず喚声を上げ

た。初めて二〇〇mを越す高所に立つて、高山のもつ厳しさとすばらしさを体感した僕は全く興奮してしまった。

あさまやま
浅間山

は眺めていて飽きない山だ。信越本線の車窓から、あるいは軽井沢高原から見るとのどつしりと安定した山容は本当に心がなごむようである。草木の繁殖を許さぬ、その秀麗とまで言える山肌は、人の心を捉えて離さない。噴煙を上げた男性的な山容の中に、女性的な優美さを合わせもち、雄大な裾をひいて浅間山は上信越国境に浩然とそびえ立っている。その裾野に展開する牧歌的な風情。そして延々と続くカラ松

の林。そこには人を詩人にして、自ずと散策に誘い込む静かな道が幾筋も続いているのだ。僕は高原を去るバスの窓からくに入るように浅間山の雄大な姿を見つめ続けた。天をつかればかりの火山礫のスロープは、見ているとそのまま頂上まで一気に駆け登れそうな錯覚さえ引き起こす。陽光にちよんと光る天辺を仰ぎ見て、僕は今度来る時は必ず自分の足であの頂に立つてやろうとその時心に誓った。(その思いは三年後の夏に実現した。)

旅の最終目的地となった霧ヶ峰高原は文字通りの高原であつた。高原とはこのようなもの

を言うのであろう、どこまでも果てしなく広がる溶岩台地のゆるやかな起伏。その広い高原を蟻のように黙って歩く僕は、そこで大きな解放を知った。ちつぽけな私利私欲に翻弄される自分に反省を強いられるようであつた。大自然はそんな底力を持つて僕を包み込んでくれた。

志賀高原から白根山、浅間山そして霧ヶ峰へと、山と高原を巡る旅の思い出は尽きない。僕はこの旅で初めて本当の山を知った。何の小細工も及ばぬ大自然の山を。旅から帰つて久し振りに見る神戸の山は、もはやちつぽけな箱庭でしかなく、僕の魂を揺さぶるものではなかつ

た。旅の感動さめ遣らぬ僕はもうバスによつて無力に高所まで運ばれることには満足出来なくなつてしまつていた。すぐに旅費の余りで「好日山莊こうじつさんそう」で革の登山靴を買ひ求めた。

この旅を契機に、僕は完全に山の魅力に取り付かれた。そして二年後、大学最後の夏休み、僕は北アルプス「槍ヶ岳」の頂の岩にすがり天の真中に立つことが出来た。卒業後あこがれの長野県での教師の夢は叶わなかったが、毎年夏を迎えるとしばし仕事を忘れ、さわやかな昂奮を求めて信州に旅立ち、名だたる名峰にチャレンジするのが年中行事となつてしまつた。

その山旅も職場の仲間らとグループで登ることもあつたが、どちらかと言えばほとんどの山が単独行であつた。独り若さまかせ地図上のコースタイムを縮めることを生きがいとするように稜線を駆け巡つたこともあつた。気のおけない仲間と語り合ふ、感動を共有できる山歩きも楽しいことに違いないが、僕の場合は何故か群れを離れて独りで歩き、自分を主人公にするこゝとでほんの少しヒロイックになることがうれしかったのだと思う。独りの山旅は無論寂しいことと、一日中口を聞かずにいることになるし、瘦尾根で道がはつきりしない時や、谷から吹き上

げてくる霧で僕を盲目同然にしてしまう時などは本當に心細い。けれどもその寂しさ、心細さの中で山から受ける試練は随分貴いものがある。もちろんそのためには淋しさと同時に当然強い緊張感も伴っているが、その緊張感こそが貴く、より大きな感動を生むのである。僕はそういった意味でも親しい仲間と山へ登る楽しさを否定はしないが、気ままに自分のペースで山頂に立ち、絶景を独り占めできる単独行を好んできた。独りの山旅の経験は精神的に鍛えられることが極めて多くまた大いはずである。そこで得た自信は人生の中で遭遇する実に多

様の苦しみに立ち向う精神力を培ってくれるものと僕は確信する。

山に登れば僕はいつでも蘇る。三〇〇〇mの高所に立つこと

の何と言う雄々しい孤絶感。

下界より遠く隔たり、誰も知らない山の頂。独り生きていること

の喜びをしみじみと味わう。僕の

の行手に雄々しく立ちただかる

山、山。昂然と抜きんでてそび

える大地の力。山はいつでも僕

を鞭撻する。山は僕の精神を浄

化し、魂を昂揚させずにはおか

ない不思議な力を秘めて屹立

する。その頂に立つ時には痛快

な征服の喜びと誇りがある。そ

こでは空気もぴんと張りつめて

震えるような快感に襲われるだろう。だが、それよりも更に大きなことは、自分という人間をむき出しの非常の自然の中に置いて確かめるといふことである。

若い頃僕の魂を揺さぶった幾

多の山。それらの山の魅力につい

て更に言及したいところだが、

己の表現力と語彙の乏しさが

それを許さない。山頂に立った

時のあの感動を十分に筆に託

すことのできないもどかしさ故、

せめて僕の大好きな山の詩を一

つ紹介して筆を置くことにする。

ここにして

友よ

見よ

見て思へ

山は地の

天上めざす

あこがれよ

編集室(注)

文末の詩は堀口大學の詩集『人間の歌』(昭和十八年)所収「山」より

ここにして

友よ

見よ

見て 思へ

山は地の

天上めざす

あこがれよ

(河口湖畔にて)

娘の出産

魅華

去年の8月の末は一家に喜びが沸き立った。次女に長男が生まれた。ただでさえ孫が生まれてくるのは嬉しいものなのに、難産の末なので涙があふれてしかたがなかった。

8月19日が出産予定日だったが、陣痛がくる気配はないので、後一週間同じ状態ならば陣痛促進剤を使って出産しましょうと医師から言われた。

私が娘たちを生んだ時も、陣痛が微弱だったので促進剤を使って出産したのだが、その頃は知識がなくその怖さを知らなかった。その後まれに子宮が破裂するケースもあることを知り、驚愕した。

今回娘が自然分娩でなければ、その薬を使うことになる……不安で心配でどうか自然に陣痛がきますようにと祈った。

しかし、一週間経つても状態は変わらなかったの
で、入院して出産することになった。ただでさえ心配性の私は娘を見守りながら、陣痛促進剤の怖さも知っているので、つい良からぬことを考えてしまうこともあった。

病室にはお義母さんとお婿さん、私の長女、孫のりおんがいた。点滴を始めて4、5時間経過しても陣痛の間隔は短くなるものの、娘は冗談に笑えたり話をしていた。出産が近づくと痛みは笑えるころではないのに娘には余裕があるので、今日中に生まれてくるのだろうかと心配になったがやはり、これ以上点滴を続けることは赤ちゃんに負担がかかるので、夕方の4時に点滴を打ち切られた。

娘はもちろんだが、みんな産声を聞けるのを待

ち望んでいたのがっかりして病室を後にした。

次の日も朝9時から点滴を始めた。昨日に比べると強い陣痛がきているのに思うようにお産が進まない。苦しい思いをしているだけの時間が過ぎていく。何故なんだろう。婦長さんに聞くと娘の緊張が強いので、子宮口が開きにくいせいもあると話された。

そう言えばこの娘は子供の頃から注射など痛い思いをすることが苦手で、逃げ回らないにしても手こずった。

本人が一番つらいのだが、側で見ている者も心配でたまらない。心の中で手を合わせ、今日は生まれますようにと何度も祈った。

痛みがくると背中をさすり、腰をさすり、痛みのない時には少しでも食べ物を口にする方がいいので、気を使った。娘がぼつんと「ほんまに生まれてくるんかなあ」と弱気なことを口にすることもあった。

「赤ちゃんも頑張ってるんだから、ママも一緒に頑張らなきゃ」私はそう言いながら娘の気持ちと思うと涙が出そうにさえなった。

7年前孫のりおんが生まれてくる時もやはり難産だった。あの時も入院して3日目に産声を聞いた。痛みで眠れない夜を二晩耐えての出産だった。今回と同じように気をもみ、痛さに苦しむ娘を見守り続けた。長女は陣痛が自然にきていたので、赤ちゃんも自然に下がっていて、子宮口が開けばお産になると準備万端だったが、次女と同じで子宮口が硬くて難儀した。

私は2人を生む時は安産だったので、娘たちもそうだろうと高をくくっていた。

1日が過ぎ、2日経つても生まれる気配がないので私は心配し過ぎて、娘の側にいるのが辛くなり何度も病室を出て、新生児室をのぞくと生まれた

ばかりの赤ちゃんが何人もガラス越しに見える。いつになったらここに寝かせてもらえるんだろうと、弱気になったことを思い出す。

そして又あの時と同じ思いが巡っている。あまりにも生まれてこないのです、お産は一步間違うと命を落とすこともある。側で見守りながら要らぬことが浮かんで消えることもあった、頭を振って考えまいと思った。必ず元気に生まれてくるそれだけを思つていよう。

2日目も空しく過ぎ去り、「明日また頑張りましょう」の医師の言葉が病室に響いた。家に帰って主人に話すと「そうか」の一言しか言わなかったが、寝る前にそつと仏様に手を合わせていた。私は夜布団に入つてもなかなか寝付けない。何度も何度も寝返りを打ちながら、娘の顔を思い浮かべた。不安でたまらないだろうな、眠れてるかな。お腹の赤ちゃんは元気でいるかな。次々に色々なことを

考えてしまう。気が付くと朝の4時だった。うつらうつらしたような、しないような感じで起きてすぐに仏様に手を合わせた。母子共に元気で生まれてきますように……：すがる思いだった。

長女の子車で病院に行き、「今日こそご対面だよ」と励ました。3日目は点滴をする前から自然に陣痛がきていたので、これまでとは違う強い痛みが間隔をおいてくる。生みの苦しみを必死で耐えている。3日目ともなると代わつて生んであげる方が楽な気がしてくる。

お昼の診察で「赤ちゃんのことも考え、帝王切開に切り替えようかとも思いましたが、自然に生めそうなので最終的な手段にします」と医師から言われた。

病室から陣痛室に移され、お婿さんが付き添つた。痛がる腰や背中をさすり、二人三脚で頑張っている。病室でひたすら手を合わせてその時を待

つ。時間がなかなか過ぎない気がした。

2時、3時、4時：いつもなら気づかぬうちに過ぎていく時間が、ゆつくり、ゆつくり時を刻む。夕方の診察で医師から非情なことを言われた。「今日も生まれそうにないので、明日頑張ろうか」娘は必死で抵抗して「どうか、今日中に産ませてください」と涙ながらに言った。訴えに医師は破水させて様子を見ようと喋ってくださり、4時で打ち切る点滴も続けられた。

するとそれから一時間して思わぬ展開となった。子宮全開！！分娩室に運ばれることになった。ベッドに寝かされるなり出産体制に。看護婦さんからお医者さんが来るまで我慢してと言われるくらい潔い出産になった。陣痛の波にうまくのって褒めてもらえた理想的な出産をした。

「おぎゃあ！！おぎゃあ！！」2013年 8月2

8日午後5時33分 元気な、元気な産声をあげた。

ただ、ただ嬉しくて涙があふれてしかたがなかった。長女と手を取り合って泣いた。安堵した。今こうしてあの時を振り返っていても涙がにじむ。娘も、孫の珀斗も無事で本当によかった。あんなに嬉しかったことは近年ない。

出産はドラマだと言われるけれど、本当にそうだなと心の底から思った三日間だった。



紫陽花の咲く庭

高阪博一

細かな雨が降り出した。リビングのカーテンを開けて小さな庭を眺めた。紫陽花が見える。こんもりとした葉陰に、白くて丸い花がいくつも顔を覗かせている。嫁いでいた一人娘が、母の日に贈ってくれたのだ。もう、何年経つたらうか。当初、鉢に植えてあつたものを、花が済んで、庭に植え替えたものだ。和也はこの色が好きだつた。何の混じりつ気もない潔さが好きだつた。じつと見ていると、気持ち映っているような気がするのだつた。

葉に落ちている水玉が徐々に大きくなりだした。水玉が膨張を越えると下に流れていく。意外に早い流れだ。「どうして、水無月、なんやろう」と和也は相手を求めるように声を出していた。いつもは、キツチンの方からする声がしない。「買い物にでも行つたんかなあ。一声、かければ良いのに」ちよつ

と不満げに、いつもはいるはずの方角に向かつて、視線を投げかけた。壁に架かつた時計はもう十時を過ぎていた。

和也は六十歳で定年退職した。それ以来、何かをすることもなく、家でブラブラと過ごしていた。外で何かしようと思ふことはあつても、結局そうすることはなかつた。そんな生活が、もう二年余り続いていた。「無為徒食か、理想の姿なんやけどなあ。それでも、一日は長いなあ。この二年で、腹がこんなに：、なあ」と薄いTシャツを盛り上げているその部分をまじまじと凝視した。

別に焦っているわけではない。残り時間が刻一刻と少なくなっているのは自覚している。サラサラと落ちて、下に塊が出来るに従い、上の塊が少なくなつていく砂時計のようなものだ。ただ、和也の時計は上と下を引つ繰り返せないだけだ。一時間が消え、一日が消え、一年が消える。この時間は引き算ばかりで、足し算がないのだ。

雨はまだしめやかに降り続けている。微かに響くその音が遠い世界に誘うように聞こえてくる。「さつき、起きたとこやのに」と和也は誰にいうともなく呟きながら、何か肩の力が抜けていくのを感じていた。目の前が仄暗くなるのを、薄らいだ意識の中で感じていた。

「和ちゃん、起きや、遅れるで。今日はなんたらいう科目の試験と違うの？ 学校まで、時間かかるやろ。早ようしいや」とイライラしたような母の声が聞こえた。和也はゆつくりと目を開けた。一夜漬けは和也の得意技だった。小学校から大学まで、試験の三日前からしか勉強しなかつた。それでも、なんとか大学まで辿り着いていた。徹夜して、寝たのは六時頃だった。ぼんやりとした頭はもう少し寝たいと和也に訴えていた。

「今日は店の手伝い、和ちゃん、でけへんから、大変なんよ。お酒の配達は、あんたがすると早いからな

あ」とブツブツ小声でいいながら、母が恨みがましい顔を向けている。和也は傍にある時計を見た。午前十時を針は指している。「大丈夫や。間に合うわ、京都まで、一時間半で行ける。昼一番の試験やから」和也はそういうと、起き上がり、眠たそうに眼を擦りながら、ベッドに腰を掛けた。大きな欠伸と伸びをして、母の方にまた顔を向けた。

「配達は適当にやりな。それはそうと、親父は、昨日も、帰って来んかつたん？」

「うん。帰って来んかつたわ」

母のどこか諦めたような声が聞こえた。二人でしていた店を、父が母に任せつきりにするようになって、もうどれ程になるだろうか。どうして、そうなったのか、和也には分からなかつた。いくら仲の良い夫婦でも、一日中、顔を突き合わせていれば、嫌になることもあるだろう程度に和也は考えていた。

「店、大丈夫なん」

「もう、あのひとは数の中に入れてないから。あてにする、余計、腹が立つし。まあ、店は何とか遣つていけるから」

「そやなあ、山本さんがいるから、ええやろうけど」

「あの女、若いのに、客あしらいが上手やわ。それに、何でも遣つてくれるから、ほんま、助かるわ」

「出してみるもんやなあ、求人票」

「ほんまや。あんたに聞いて、あかんで、もともとやと職安に出して正解やつた。山本良子と書いてある氏名欄の横に、二十八歳となつていたのには、間違いとちやうかと、びつくりしたわ。それにしても、運が良かったなあ。当つたなあ」

「まだ、来て、三か月ちよつとやけど、大事にしいや。逃がしたら、あと、ないでえ。分かつてるよね」

「分かつてるつて。大事にせんとねえ」

母は口元に僅かな笑みを残して、また、和也に向かつていうのだった。

「グダグダいうてたら、遅れてしまうよ。早く、服着

て、行きなさいや」

帰宅したのは、もう夕方も過ぎていた。酒屋といつても、立地条件の関係から、配達するより、立飲み客を相手にする方が多い店だった。いつも、この時間帯が込み合っていた。食事が済んで、一息ついて、家を出てくるのだろう。顔見知りの客が殆どだった。それも、和也が生まれる前から常連というひと達だ。「ここは、女房公認の飲み屋や。安いし、サービス満点やし、それに、紐ひもはついてるけど、別嬪さんがいてるし」といつも化粧つきの気のない、ラフな格好の母を見ながら、悪戯つばくいふのだった。和也はこんな会話が好きだった。一緒に歳を重ねていくことは、悪いことではないと思っていた。

母はいつもL字型のカウターの中に入っていた。山本さんも入っている、お互いエリヤを決めているようだった。L字の短辺側を母が、長辺側を彼女が担当している感じだった。七・八人も入れれば、いっぱいになるのだが、見た目には、長辺側に偏つてい

ると和也は思っていた。「そら、若さには勝てません」と呟きながら、ふと、父のことを思い浮かべた。「親父も、ええ加減にせなあ。放り出されてしまふで。それにしても、よう、我慢してるよなあ」とそんなことを思いながら、母の方を見て、ちよつと頭を下げた。

「お帰り」と母は一言声をかけて、また客の方を見て何やら話している。奥の方から「和ちゃん、試験どうやった」と声がかかった。また、母が喋つただ。酒の肴にされるのは嫌だった。常連さんとの話だから、家のこと、家族のこと、近所のことなどが話題になるのは仕方がないと和也は理解していた。そう承知していても、何かすつきりした気分にはなれなかつた。そんな時は極端な答えを返すことに決めていた。

「カンニングをしていると、疑いをかけられました」「ほんまか、うそやろ」

一同の視線が和也に集まつた。和也は申し訳な

さそうに、黙つて俯いている。皆が固唾を飲んで、次の言葉を待つている。やおら、顔を上げる。皆をじつと見つめる。母が視界に入る。母の目が笑つている。「僕を信じますか？」というど誰かが「そら、信じます」と答える。皆が口の中の酒を飲み込んで、何となく笑いを押し込めているように、和也を見てい

る。「皆さんは救われました。そのお祝いに、今日は僕が奢ります。これ、信じますか？」と和也がいうと、すかさず、誰かが「そら、信じません」と答える。「そうです。うそです。ドンドン、飲んで下さい。払いはご自分で、ニコニコ今日も現金で。そうすると、この店はとつても繁盛するのです」といつて、和也は吹き出しそうになるのを堪えた。「いわれいでも、飲みますがなあ」と誰かがいうと、皆一斉にどつと笑いながら、同調するのだった。

和也は二階の自室に上がつて、机に向かつた。下の騒めきは何も聞こえてこない。静かなものだ。前

の壁に目を遣つて、貼つてあるスケジュール表を眺めた。あと一科目の試験が残つていた。「児童文学概論やなあ。何の用意もしていない。どんなところが出るのかなあ。もうちよつと、授業に出るべきやつた。今頃、後悔しても、しゃーないけども」とぶつぶついいながら、机に積んである本の中から、その教科書を探していた。後ろ方でドアの開く音がした。振り返つた。母だつた。下にいる時と違ふ、何か悲しそうに思い詰めたような顔を向けていた。

「和ちゃん、かまへんか」

「うん、僕はええよ。そつちの方こそ、ええのん？」

「忙しいのと違ふの？」

「ええねん。山本さんがいたら大丈夫やわ。あの女のパート時間が終わるまで、まだもうちよつとあるからねえ」

「どうしたの。どんなことなん」

「店が終わつたら、付き合つて欲しい所があるんやけど。まだ試験やろう。頼みにくいなあ」

申し訳なそうな母の声だが、どこか強制にも似た厳しい響きが和也には感じられた。

「どこやの」

『「ナカ」や』

「ええ、『ナカ』やて」

「そう。心当たりを探したいねん。お父ちゃんはいそうな…」

和也はちよつと驚いて母の顔を見つめた。店では見せたことのない青白く凝固したような面差しだつた。あんな広い所をどう探すつもりなのかと和也は困惑を隠せなかつた。

『「ナカ」とは、店の前の二十メートル程度もある道路の向かい側、壁に囲まれた街のことだ。この壁は一辺が一キロはあるだろうか。既に茶褐色に所々崩れているが、はつきりと残っている個所も多い。和也は子供の頃この壁の意味が分からなかつた。子供心に不気味で怖いものと思つていた。或る時、母から聞かされた、『「ナカ」から、出られんように

するためや。和ちゃんが大人になつたら分かるわ。けど、『ナカ』は行かんといてほしいなあ」と。母はそれ以上何もいわなかつた。和也もそれ以上聞くとも思わなかつた。別に、分かりたくもなかつた。

店の終わつたのは、それから三時間程経つた頃だつた。この三時間は、和也にとつて、有難かつた。多少は試験の準備も出来た。「文学なんやから、答えはいろいろある。それらしく書けば、何とかなる。兎に角、書けばOKや。それに、大北先生はええ方や。優しいつて、評判や。誰かが、書けなくなつて、達磨の絵を書いて出したら、『手も足も出ませんの暗喩、この婉曲叙法は素晴らしい。但し、泥鱈どじょうは決して二匹いないことを肝に銘じよ。可』と書いたメモを、後から貰つたつて聞いたことがある。きつと、大丈夫や」と和也は淡いスタンドの光を眺めながら、独り言をいい、気持を落ち着かせていた。「和ちゃん、ええか。行くで」母の声がドアの外から聞こえた。和也は机の上を急いで片付けて、立ち上がり、

ドアを開けた。「ほな、行こうか」母に向けて、静かな口調で語りかけた。

二人は店を出て、道路を渡り、『ナカ』に入った。母は黙っている。和也は母の後ろに従つて歩いた。連なるけばけばしい店は、正面の戸を開けて、薄つぺらな赤や青い光を投げかけ、獲物を誘っている。昼は深く眠り、褪せた色ガラスだけが澱んだように、この街を覆う。夜は実じつのない嬌声だけが渦巻き、男の獣じみた声が辺りに充滿する。ふと、母の肩を見た。どこか震えているようだった。家を出て、もう十分程歩いていた。

「当てはあるの。何か所かあるみたいやけど。最初は、どこに行くの」

「一時間程前に、聞いたとこがあるんや。確実な話なんよ。もうちよつとや、歩いてなあ」

「親父がそこにいるんやね」

「そうや、いる。今日はあの人に別れ話をするねん。もう、耐えられんわ。あんたも、話の分かる年頃や。」

それに、一人息子のあんたしか、わたしには、もうおれへんねん。一緒に、聞いてて欲しいねん」

母がこんな思い詰めているとは思わなかつた。

『この世のことはこの世で納まる』が口癖の母だつた。余程、衝撃的なことが、あの数時間のうちにあつたのかもしれない。和也にはそれが何なのかわからなかつた。原色のネオンが辺りを単調に照らす表通りを曲がつて、饅^ずえたような店の並ぶ細い道に入つて行つた。

「ここや」と手に持った小さなメモを見ながら、母がいつた。『スタンド　しずく』と書かれた焦げ茶色のドアに、薄らとした光が当たつていた。母が把手を引こうとした。和也は母の小刻みに上下する肩に、後ろから手を掛けて、それを制した。

「ちよつと、待つて。親父、ここに居るの、確かなんやね」

「いなくても、ここで、いどころはきつと分かる」

母の確信を持った言分に、和也は従わざるを得

なかつた。

和也は嫌だつた。開けられた玄関先で、若い女が濃い青色のアイシヤドウをして、真つ赤なルージュの口許をほころばせ、媚びを売る。白髪頭を隠そうともせず、細い身体を懸命に支えながら、薄闇の路地に年老いた女が佇む。目の前のドアを開ければ、そんな女達に会うことになる。今まで、『ナカ』は道路の一つだつた。単に駅への近道で通る場所しかなかつたのだ。それがもう通用しなくなつてしまう。自分と直に触れ合う場所になつてしまふと和也は感じていた。

むつとするような店内だつた。煙草の匂いが漂い、生温い空気が辺りに充滿し、薄暗い光が安つぽいカウターを照らしていた。客は誰もいない。女が二人、一斉に和也らの方を見た。上半身しか見えないうが、一人はキラキラと光るラメ入りのドレスを着た、明らかに太つた初老の身体を感じさせる女だつた。もう一人を見た。栗色の長い髪^{かみ}を被り、薄い

化粧にまだ素人らしい感じを残している若い女だった。和也は直ぐに分からなかった。隣にいる母が声を出した。「山本さん、いつから出てるの？」と皮肉めいた声が低く響いた。和也は驚いてまじまじとその若い女を見つめた。間違いはなかった、あの快活で、飾りつきの山本さんに。

「お父ちゃん、どこにいてるの？」母が問うた。彼女は驚いたように母を見たまま、押し黙っている。「どこやの」母が苛ついたように鋭くもう一度言葉を投げた。和也は気が気ではなかった。母が掴みかかつたらどうしよう。親父がここに出てきたらどうしよう。別の客が入ってきたらどうしよう。そんなことばかりが、和也の頭を駆け巡った。こんな修羅場、経験のないものなあと和也は心の中で小さく呟いて、母を見つめた。

「博^{ひろし}さんは、この時刻、私のアパートにいます」
「なに、博さんやて。名前で呼ぶか。そんな仲なんか」

「すいません。ご主人は……」

彼女が素晴らしい直した時、母の顔が、さつと青ざめるのを和也は見逃さなかった。こんな一言くらいで和也は思った。大したことではない、単に名前を呼んだだけだ。

「そんな仲やつたん、あのひとと。名前をなあ、呼び合うなあ。ええ仲、やつたんや。あんたはヨツちゃんつて、呼ばれてたんやろ」

もう一人の女が念を押すように、嘲笑うように、母に向かつていうのだった。

「あんたは、黙つてて」

母がぴしやりとその声を制したが、多少の上擦つた感じを和也は感じていた。燃え盛る炎を内に押し込めたような沈黙が流れた。和也は長いと感じた。誰か、何かいつてくれと思った。

「アパートは上田^{まち}町やなあ」

「そうです」

「名前は」

「レジデンス・ブルースカイです」

「しやらくさい名前やなあ。分かつたわ」

母はドアを閉めた。ドンという大きな音が、薄暗い路地に響き渡った。

和也はまた母と歩き出した。母が手を目にやっているようだった。母の泣き顔をまともには見たくなかつた。前を向いたまま歩いた。そして、母に尋ねた。

「何で、分かつたの。僕が帰つて来た時は、こんなにはつきり分からん感じやつたやん。どうなつたん？」
「あの女が帰つてから、馴染みの浜ちゃんがなあ……」

人は良いのだが、軽率な物言いをする浜田さんを和也は思い浮かべていた。「ああ……あ、余計なことをいうたんや。心配してくれるのは、ええねんけどなあ」と和也は心の中で溜息をつくのだった。

『知つてるか、あの女と旦那のこと。大分前から、ええ仲なんやで。あの女が応募してきたのも、旦那

がいうたんやて』つて教えてくれたんや。なんも、知らんと可愛がつてるのを見て、わたしが可哀想になつたんやて」と母は悲しそうに小さな声で呟くのだった。和也はどう応えて良いのか分からなかつた。

自分が職安に求人することを勧めた自責の念と男女間の不可解な情愛のことが、綯交ぜになつて頭の中をグルグルと駆け巡つた。「それで、今から、上田町へ行くの」和也の言葉に、母は立ち止まつて、じつと前方の鮮やかなネオンを見ていた。握つた両手の親指を小刻みに動かしながら、何か考えているようであつた。さつと風が流れた。吹つ切れたように、母は和也の方を向いた。

「行くのは、止めるわ」

「ええ、どうして」

「怖いわ。お父ちゃんの顔を見たら、わたし、何するか分からんわ」

「僕がいてるから、危なくなつたら、停めたげるよ。そやから、お母ちゃんの気のすむようにやつたら、え

えねん」

「ありがどう。何するかいうても、暴力、ふるう訳がないよ。そやなくて、きつと、いうてしましもうなんや。別れようつて。わたしは、帰つて来て欲しいねん。もう一度、お父ちゃんと、やり直したいねん」

泣声の混じる話を聞きながら、母の顔を和也は見つめた。涙が頬を濡らしていた。この涙の意味が和也には分からなかつた。どう考えても、親父は無責任過ぎると思つた。この母の、そして、あの女の心の内側を、斟酌したことがあるのかと思つた。親父にそれなりの理由があつたとしても、エゴイストそのものだと思わずにはいられなかつた。

「お父ちゃん、明日、帰つてくるわ。大胆な割には、気の小さいひとやから。あの女は、明日から、もう、来んなあ、来れんなあ」母が確信有り氣にいうのだつた。「和ちゃん、お父ちゃんが帰つてきて、黙つときや。当分は二人で無視するんやで。あの気の弱いひとには、これが堪える筈やから」母はもう

明日のことを考えていた。泣くのも早い、笑うのも早い。そうでなくては、あの街の近くで、小さな酒屋を切り盛りすることが出来ないのかもしれない。和也は前を向いた。開けつばなしの玄関に坐つている、薄つべらな衣装に身を包んだ女達の笑い声が和也の顔を掠めていつた。

ガタンと音がした。和也は目を開けた。ぼんやりと辺りを見回した。時計が目に入った。十一時を指していた。どことなく、まだ寝ている感覚を引きずりながら、キツチンの方を見ると、妻が買い物バックをテーブルに置いていた。「帰つたの」というと、「よく、寝てたね。雨の日はいや。つくづく、免許があればと思うわ」と妻がバックから品物を取り出しながら答えた。「コーヒー、入れようか」と和也の方を向いて続けていうので、「ありがどう」と和也は応じ、キツチンの方に歩いて行つた。

「そろそろ、命日じゃない」

「何の」

「この親不孝もの！ お義父さんでしょ」

「そうや、そうや、親父のやつたなあ。もう、何年になるんかなあ」

「二十五年よ、ずいぶんになるわね」

妻はコーヒーカップを和也の前に置きながら、何かを思い出したかのような顔をして、椅子に腰を掛けた。和也はカップを手を取って、一口含んだ。ブラックの苦味が、喉を通っていく。徐々に、頭が覚醒していくのを感じていた。

「お義母かあさんは、それから一年程経って……。ほんと、呆気なかつたわ」

「普通、女やもめは長生きするそうやのに……。ちょっと、慌てもんやわ」

「また、そんなこと、いう」

「冗談、冗談。そや、おふくろ、親父が亡くなつてからも、一人で住んでたなあ、あの古ぼけた酒屋に。馴染みさんが来るからやいうて、店、開けてたもん

なあ」

「元氣やつたのにね。突然倒れて、そのままやつたね。命日が十日程遅いだけやものね。仲、良かったんではよ。いつも、二人で、店、やつてはつたもの。お義父さんが、きつと呼びはつたんやね」

「そうやなあ。喧嘩なんか、せんかつたなあ。あの二人。やつぱり、赤い糸で……。なんやろうか」

和也は親のことを詳しく妻にいつていなかった。別に、昔のことをあれやこれやと言ひ募つても、仕方がないと思つていた。過ぎ去つてしまつたことは、もうないのだ。大事な今は今ある現在なのだ。その時、仲が良ければいいのだ、どんな過去を背負つていたとしても。だから、別に何の抵抗もなく、妻にそう答えていた。

「クッキーがあるけど、食べる？」

「もらおかなあ」

「そうや、紫陽花の花言葉つて知つてる？」

「知らんけど」

「あれだけ、好きやいうてるのに……。こないだ、雑誌見てたら、綺麗な写真の横に書いてあったわ。『辛抱強い愛』なんやて」

「ふーん、そうなんや。辛抱強い……」

「ええ。何かいった？」

「いや、別に」

和也はリビングの椅子越しに、庭の方を眺めた。

「おふくろ、あれからは、親父のあの癖くせについて、何も喋らなかつたなあ。大丈夫やつたんやろうか？」と和也が心の中で呟いていると、不意に、母の顔が浮んできた。それはあの夜の帰り道で見せた、強い確信に充ちた顔であった。庭では、細かい霧のような雨が白い紫陽花を濡らしていた。

了



春の雲

子らの笑顔思いながら毛糸編む

雛人形飾る 娘がいればこそ

「お休み」と頬に娘のキス 春の星

娘はわたしのコピーか話し方も顔も

そつくりな娘の寝顔 合歡の花

保育所を去る日の涙止まらぬ娘

娘との影踏み 影踏まれてばかり

娘と渡るパールブリッジ春の雲

彩さい

華はな

手を振る娘に「いつてらっしやい」と蝶が舞う

制服とランドセル娘は一年生

叱られて素直になる娘 初風

娘と入る柚子風呂 手遊び唄などして

ピアノコンクール 娘より浪立つわたしの胸

九九双六 二年生の娘につきあつて

「ただいま」の泣き顔 何かあつたのね

産まれてから八歳までの娘がモデルの神戸新聞に掲載された俳句です。出産の休暇中に俳句を作り始め娘をモデルによく作っていました。が、中学・高校になるにつれてだんだん娘の俳句を作らなくなっていました。その娘も今春大学を卒業して就職していますが今回の特集で振り返ることができました。

息子

小野村 新

東の窓から、なだらかな丘のような山並みと、その懐に抱かれた小さな新興住宅地を眺めることができた。川瀬は、緑の木々の中に横たわる静かな家並みの景観を、小野市のビバリーヒルズと名づけて密かに楽しんでいた。先日も、十年來の大雪で美しく彩られたその風景を、異国のホテルに滞在しているかのような錯覚におちいりながら眺めたものであった。

しかし、その書齋からの眺望は完全に遮られてしまい、川瀬の視界には無機質な白い壁が、永遠に動かない障害物のように居座った。眺望が遮られたのは、東隣に長男の良太の家が建ったからであった。消費税が上がることもあり、小野市内の土地を物色していた矢先のこと、川瀬の住む東隣の土

地がたまたま売りに出された。私たちが住み始めて三十年の間、一度たりとも姿を見せなかつた土地の持ち主が、とうとう土地を売りに出したのである。

その土地に不動産屋が立てた看板には、「八百九十五万円」の価格が表示されていた。その土地を、長男はぜひ購入したいと言った。

「お父さん、土地の代金、貸してくれる？」

良太は遠慮がちに、小さな声で言った。良太に貯金などないことは、普段の生活ぶりでもわかつていたが、川瀬はあえて尋ねてみた。

「貯金、全然ないのか？」

「そうなんだ。子どもに、いろいろとかかってね……。それに、あそこは、家賃も高いんだよ。」

良太には五歳の女の子を頭に、三歳、一歳の女の子がいた。

「貸してくれる？」という言葉は、「呉れる？」と同

義であることを、川瀬は察していた。三年前に定年退職した川瀬に、どれほどの退職金が入ってきたか、それに、儉約家で貯金が趣味のような妻の道代が、これまでに相当蓄えていることも良太は知っているはずである。

良太の友人たちも、ほとんどが土地代だけは親から出してもらっているようである。中には、田んぼを宅地造成して貰い受けたり、親の家の横に新宅を建ててもらっている友人もいた。川瀬の住む住宅地にも、二十代や三十代の若者が新築して入ってくるが、やはり何らかの形で親の援助を受けているらしかった。そのようなわけであるから、良太が親である川瀬から土地代金を出してもらっても、何ら特別なことではないのであった。

「土地代は貸してやるにしても、建物の方はどうするつもりだい？」

「ぼくの年収だと、二千五百万円までは借りられ

るらしいんだ。三十五年ローンを組んで返済していきよ」

良太は面と向かって言ったことはないが、純粹に親を看なければならぬといった思いがあり、結婚相手を選ぶ条件としても、親の近くに住んでくれることを挙げていたらしい。このことは、妻が親しくつきあっている近所の主婦に良太が打ち明けたことがあるらしく、彼女は、最近まれにみる親孝行な息子さんだと良太のことをほめそやしたものであった。そういえば、良太がまだ小学生だった頃、下の二人の弟に対して感情を露わにし、「ぼくは、長男なんだぞ！」と叫んでいた光景をみて、思わず吹き出してしまったことを、川瀬は懐かしく思い出した。どこで生まれたのか、良太の長男意識は際だっていた。

良太の家の基礎工事が始まった七月の中頃から、川瀬は不眠の症状に悩まされるようになった。

十二時に布団に入っても眠ることができないので、二時や三時に酒を飲む。それでも、眠れない。夜明け方になってようやく、浅い眠りがおとずれる。そのような日々が続いた。

いつしか、幻聴にも悩まされるようになった。それは、睡眠不足でもうろうとした川瀬を襲い、苦しめるのであった。

ハタラカザルモノ　クウベカラズ、ハタラカザルモノ
クウベカラズ……

オマエハ　ナマケモノ　オマエハ　ナマケモノ……

六十三歳で会社を退職した川瀬には、小さな挫折感のようなものが澱のように残って、消えることがなかった。定年退職後、六十五歳までは再任用の形で勤めようと考えていたにもかかわらず、二年間が辛抱しきれずに、辞めてしまった。職場の間関係に嫌気がさしていたとはいえ、体力も旺盛

だったし、二年間くらいは十分働くことができたのだ。

朝の九時まで眠り、その上昼寝までして、夜はテレビばかり観ている。四月から始まったこのような毎日の生活に、罪悪感のようなものがつきまとい離れないのであった。朝の七時から夜の七時まで働いて、休日も出勤することが多かったこれまでの生活には、それなりに充実感もあったのだが。

川瀬は、基礎工事の様子を二階の書斎のカーテン越しに眺めてみた。五十がらみの二人の男性と二十歳くらいの若者が、ミキサー車からはき出される生コンを、基礎の型枠に流し込む作業をしていた。彼らは夏の太陽の下で汗を流し、着々と家屋の土台を築き上げていく。その光景は、川瀬に、「実利」という言葉を連想させた。

それに引きかえ、自分はいつたい何をやっているのだろう。読書といえれば格好いが、週刊誌と三文小説ばかり読んでいる。後は、テレビとゲームとイン

ターネット三昧の日々。まるで引きこもっている高校生のような生活ではないか。

いやいや、自分も、まもなく六十四歳になるのだ。無事定年まで働いたのだから、後はどのような生活を送ろうと、誰に文句を言われる筋合いがあるのか。そう自分自身に言い聞かせても、川瀬の心の中のわだかまりは、はき出されることはなかった。

一日中家にこもっているのがよくないのだろうかと考えた川瀬は、肉体を疲れさせるため、裏山や田野を散歩した。これまでに歩いたことのない林の中の細い道をたどっていると、木々の中にひっそりと存在する小さな稲荷神社を発見したり、あぜ道の奥に突然大きな池が現れたりして、自宅近辺の意外な風景に驚かされた。室内運動として、ラジオ体操や腕立て伏せなども日課にした。しかし、どれだけ肉体を疲れさせても不眠症は快方には向かわなかった。

神経科受診を考え始めた晩秋の頃に、妻と市

民会館で、『砂の器』を観る機会があつた。以前にも観たことのあるこの映画が、不眠症から自分を救ってくれることなど、川瀬は考えてもみなかったのであるが。

『砂の器』は、松本清張の長編推理小説を映画化したもので、その中に、ハンセン氏病が原因で故郷を追われた父と幼い子が、お遍路姿で各地を放浪する印象的な回想シーンがある。風吹きすさび雪の舞い散る海岸の祠で何かを祈る父と子、凍つく夜の道端で火をおこし飯ごう炊爨でむつまじく食をとる父と子、小学生の体育の授業に見入り動こうとしない子を、何度も促す父、ハンセン氏病の療養所に赴くために汽車を待つ父を発見し、泣きながら駆け寄る子を抱き留める父……。差別を受け、いじめられ、父と子がつらく苦しい旅を続ける――。それらの一場面一場面が突き上げるように心に迫り、溢れる涙となつて川瀬の頬を伝うのであつた。

川瀬は、泣き濡れた姿を隣の道代に感づかれぬように努力した。しかし、なぜこも涙がでるのか。

不眠を伴う不安定な精神状態のなせる業か？

そうではない。二十歳の頃この映画を観た時には流れることのなかった涙がとめどもなくあふれ出るのは、子を持つ親の境地に自分が立っているからだ。放浪の旅を続けるあのいたいな子どもに、自身の子の面影を重ね合わせない親などいるだろうか。川瀬は、何度もハンカチで涙をぬぐいながら、そんなことを考えていた。

川瀬は、鳴り響くテーマ曲『宿命』にも強く心打たれた。その音楽は、親子の関係というものが永遠に逃れることのできない濃密な血の関係によつて成り立っていることを、情熱的に訴えていた。

映画を観た日から、川瀬の心の中を澄んだ水が流れはじめていた。不眠症は快方に向かい、しつこかった風邪の症状が徐々に消えるように、いつしか

治まっていた。

良太の家は予定より少し遅れ、年を越した一月の中旬に完成した。月末には、一家が新築の家を越してくる。狭い公団住宅から脱し、息子と嫁と三人の孫たちが広い家でにぎやかに生活している様子を思い浮かべながら、眼の前に広がる白い壁を川瀬はじつと見つめるのであった。



◆ ショートショート

幻影都市

石川希理

秋風が吹き始めたというのに、今日も徒労に終わった。この夏はひよつとすると、一度も仕事をせずに終わってしまうかもしれない。ノルマがあるわけではないが、こうも不景気だと、たべていけなくなる。仲間も同じようだ。ここ、三十年ぐらい前から、徐々に仕事は減りだしていたが、この四、五年は特にひどい。

今日もこんな具合だった。

夜になったので、下見をしておいた頃合の一軒を選んできてかけた。新興住宅地の高層マンションの最上階。夫婦と子どもの平均的な家庭である。遅い夕食にでかけたのを確認して忍び込んだ。マンション

ンはメゾネットタイプで内部が二階建てになっていて、上に寝室がある。二階の子ども部屋に入った途端、冷たい空気が私を包んだ。ぞくりとした。

そこに部屋はなく、あるのはどこまでも続く草原と、星が僅かに輝く夜空であった。遠くに山並みが見え、小さな灯りが一つ頼りなげに、瞬いている。

―またか…

私は呟いた。バーチャルリアリティとかで、コンピュータの描き出す世界が現実になくなった。その中に入ってゆけさえしだしたのは一九九〇年代の初めの頃である。コンピュータを起動し、特殊な眼鏡を掛け、手にはコードのついたグローブをはめる。その格好で画面の中で歩き回り、ものを掴んだり、ドアをあけたりできるのだ。

それから半世紀あまり。

いまやバーチャルリアリティという仮想現実の世界はホログラフィの発達と相俟つて、現実と区別できないところまで発展した。機械さえ設置すれば、身体に何もつけなくていい。五感総てが現実と区別のつかない世界が現れる。機械も昔のコンピュータゲーム機並みの値段である。だから家中どこでもこの仮想現実の世界が多い。それどころか、最近の高級機は、部屋そのものがほとんど異次元空間に近い。こうなると、その世界のものに触ったり壊したりできる。現実の世界との区別はますます曖昧になる。大人でも、引きこもりが増え、時にはバーチャル世界で餓死していたなんていうことも起こるようになっていた。

全方向に動く八畳大の自動路シートを使うと走ったり飛んだりもできる。その空間の雰囲気も破らないために入ると一定時間出入りできないクロージングモードもある。出るためには、コントローラーを持ちスイッチを切る必要がある。別に三十

分間しか遊べない安全装置もついている。私の入ったこの部屋は、どうやら入りやすいハーフモードらしい。これなら親はいつでも入つていける。監視が容易なので時間制限はない。その設定をしたまま、子どもは親と夕食にでかけたらしい。

「まあ、いいか。あの光まで歩いてみるか」

私は草原の風を受けながら歩きだした。空気の流れ、臭い、草の香り、星の輝き、総て感覚が鋭くなければ見抜けないほど実物に近い。本物より純粹である。子ども部屋だから、この世界はたぶんRPGゲームの一部分なのだろう。大変な世の中になったものだ。農林漁業も工業も、大部分をロボットが行うから、労働は人間にしかできないサービス業に集中している。貧富の差は大きい人々にあまり不満はない。この仮想現実ゲームは低価格で普及している。その中では野球選手になることも、大統領になることも、ジェット機のパイロットになることも可能である。もちろん大富豪の生活を経験

することもできる。アダルト版では美男美女との恋愛も、家庭を持つことも、ギャングになることも可能だ。五感を満足させるから、そのゲームの世界にひたりたいために現実の労働生活をしているようなものである。もちろん食べ物をたべたり水を飲んだり、そうした気になるだけの話である。だから、実際には腹が空くし、睡眠も必要で、現実生活は放棄できない。それでも、ゲームは人生の大部分を占めるようになってきている。

ー そのうちに人間は生まれてから死ぬまで、ゲームの中で暮らすようになるかもしれない：、現実の世界は意味を持たなくなるか

ぼんやり考えながら歩いていると光の正体が近づいてきた。大きな西洋風の館である。リアリティはあるが何となく薄つべらだ。近づいて玄関のポーチに手をやる。石の手触りだ。しかし何となく違う。どこがどうだというのではない。人間にはデジタル化できない感覚がある。それはひよつとすると曖

昧さかもしれない。私の感覚も、時間が経つにしたがつて鈍くなつてきている気がする。それが余計に曖昧さを生んでいるとも思われる。

ー しかし：

と考える。大人ならいいが生まれて以来ゲームの世界につかりつばなしの子ともはどうなるのだろう。彼らにとつて、実世界よりゲーム世界の経験が長いとしたら、そちらが本物になる恐れがある。ゲーム世界が人生であり、現実の世界は苦しいだけの架空世界になりはしないだろうか。実際、二十一世紀初頭から、生き物の生命はゲームのようにリセットできると錯覚する子どもが現れていた。それから半世紀あまりである。クローン人間は億という金さえ出せば手に入る。記憶は一旦メモリーに退避して、自分のクローンに移し替える。金持ちはずれが可能だ。クローンは肉体だけ二十代にまで成長させたボディである。しかし、クローンの劣化は数年で進む。原因は不明だ。クローンボディは違和

感もあるらしい。したがってこのごろはロボットに自分の記憶を入れる人も現れた。しかし、いくら人工皮膚を使ったところで生の肉体ではない。そこで、ゲームの世界に仮の肉体を造り、そこに記憶を移してゲームの世界で生き続けようとする試みも始まりだした。現実とバーチャルがその境界を失いつつある。

光の点は大きくなり、現れた古い洋館のドアは開いていた。足を踏み入れると埃とカビの臭いがした。シャンデリアが薄暗く大広間を照らしている。冷たいがぬめりとした風が吹き抜けた。シャンデリアが明滅して、目の前が青白く光った。私はひっくり返りそうになった。目の前にゾンビがいたからである。真つ青な顔、灰色の瞳、冷たい息が私の頬に当たった。「ぎ、ぎゃー」と叫びそうになって、私は危うく言葉のみこんだ。

ー馬鹿！

自分に言つて聞かせた。

ー馬鹿、馬鹿、これは映像なのだ

私は必死で自分に何度も言い聞かせた。

子どものRPGゲームの世界である。ライトサーベルでゾンビを倒すことができるはずなのだ。ゾンビが飛びかかってくる。私はこぶしをゾンビの顔めがけてつきだした。だが、ダメージは与えられない。人間が触れることはできるが、ゾンビを倒すには、コントローラー一体型ライトサーベルが必要なのだ。やれやれと私は続いて現れたゾンビが飛びかかってくるのに任せていた。ゾンビは、私にかみついては離れる。

「おじさん、だれ？ ゲームオーバーになるよ」

突然背後から声があった。振り返ると、子どもがコントローラーを持つてにこにこ笑っている。物怖じしない子どもだ。夕食から考えていたより早めに帰宅したらしい。白い歯を見せて世にも恐ろしいゾンビを見ている。小学三年生ぐらいの男の子だ。ゲームの続きをするために急いで部屋に入ってきたら

しい。

「五度かまれると、ゲームオーバーだよ」

私はニヤリと笑った。

「あれ？」

子どもが、私の顔を不思議そうに見た。

「五回を超えているのに、ゲームオーバーにならないや」

「おじさんは、ゲームの中の新しいキャラクター？」

子どもは手を伸ばして、私の身体を触った。子どもの手が空を切った。

「あれ、触れないキャラクターなんて……」

私は、次第に不審な顔つきになる子どもの顔を見ていた。

「わーっ、これ、触ることができないや。このソフト遅れてるぞ」

子どもはたいして驚きもしないでこう続けた。

「おまえ、できそこないのキャラだ」

そう、私はもうお察しの通り、今日ではできそこ

ないといわれる本物の幽霊である。夏には人を驚かすのが仕事だった。その成果で幽霊エネルギーがあの世庁から支給される。それがないと幽霊は死んでしまうのだ。ところが、ついに今年も誰も吃驚させられなかった。

「それに、手抜きキャラだ。足がないや？ チェッ！」

子どもは、コントローラーのボタンを押して、ライトサーベルを私に向かって振った。サーベルは空を切る。

「完全にできそこないだ。サーベルでも倒せない」

子どもはそういつて、コントローラーの赤いボタンを押した。ゲーム空間が一気に消滅して、私と子どもは、部屋の中央に立っている。

「あれ、このキャラ、電源切つたのに残ってるなんて……」

子どもの顔に恐怖が宿った。私は嬉しくなった。ついに今年初めて、幽霊として人を驚かせることが

できるのだ。

「お父さん！」

子どもがわめいて、部屋を飛び出した。

「ゲームが故障したよ！」

私は、フツと息を吐いて、あの世に帰ることにした。どうやらあの世のほうが、まともな世界になったようであった。

了



風詠社文庫

一本50,000円

天然知能水

石川希理自選集

平成26年7月7日 風詠社発行 648円 + 税

ISBN 978-4-434-19464-1 C0093

お近くの書店からご注文下さい。

※ネットのアマゾンでも手に入ります。

収録作選評(抄)

「そばづえ」

メルヘンとしては珍しいS・Fタッチのもので、星新一の系統に属するものです。このまま、短篇漫画のストーリーになりそうですが、人間の未来を予見するようなどころもあり、まだぼくらはいろんな意味で「そばづえ」をくうことが多いので、身につまされる現実感がある。

漫画家 やなせ・たかし

「ゴックン博士の大発明」

ゴックン博士の大発明は、発想のユニークさ、リズム感のある文章、人物のおもしろさでぐいぐいひっぱられました。

児童文学作家 高浜直子

「星月夜はくるまの日」

童話は一編一編が一つの小世界です。どこにもない、作者によって創作された世界の楽しさが、童話の中には溢れています。その小世界をすぐれた「小世界」とするのは主人公のキャラクターの魅力と、ストーリーの生き生きした展開です。文章力も重要なことは言うまでもありません。印象的な場面のいくつかも、なくてはならないものです。「星月夜はくるまの日」は、それらの要素を備えていて、小気味よい短いセンテンスで構成され、発想の面白さと相まって、成功しています。ネコのやや乱暴なもの言いが非常に効果的でした。

兵庫女子短期大学教授 川口志保子

■受贈誌の紹介

●ご惠贈ありがとうございました。

●アクトス会員の皆さまには、閲覧希望があまりし
たら編集室までご連絡下さい。

①『ペンペン草』13号 那珂ペンクラブ

②『明石大門』34号 明石ペンクラブ

◆ アクトス組織 ・会員 9名 読暑会員 10名

・代表 大西亥一郎

・副代表 瓜生八頼子

・編集委員

高阪博一

塩見伸介

※代表、副代表は編集委員を兼ねる。また編集委員四名で運営委員会を構成する。

※「通信」でもお知らせしましたが、とりあえずの組織です。規約などはありません。例会の場で色々話し合い進めていきたいと思います。ご意見などありましたら遠慮なくお寄せ下さい。





◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

- ◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合は手帖などにお控え下さい。
- 出欠のご連絡は不要です。

編集室から

◆次号(第24号)の原稿締切は9月末必着です。

◆7月例会は19(土)です。

第3土曜です。13時半から2時間半程度です。

例会後、参加可能の方は懇親会において下さい。

◆HPに、23号までを、PDFファイルで掲載しました。URLは次のとおりです。

<http://actos2008.o.oo7.jp/>

(ネット検索の窓から「文芸□アクトス」といれて探されても出

てきます。□はスペース)

◆通信にも記載しましたが、武田和浩様から寄付を頂きました。深謝いたします。読書会費にあて残りは会の運営費に使用したいと思えます。

◆例会は第50回となります。最初は明石市の市役所北にある「サンピア明石」、続いて「衣川コミセン」、そして現在の「サンライフ明石」と変わってきました。

例会で他の方の話を聞くと、「刺激」になります。自分の作品でなくとも内容や表記について聞いていると「ああ、私も気をつ

けない」と思います。また色々な立場のおしゃべりも楽しく、人生と創作に役立っているようです。

◆表紙絵に「ぎよつ!」とされた方もあるかと思えます。親友の「棟近喜忠氏」の習作を使うことを許していただきました。

風景画もあり人物画もあり、手足を描いたものもあり悩みましたが、今回は「少しだけインパクトを」と、これを選びます。棟近喜忠氏には紙面を借り御礼申し上げます。次回以降もお楽しみください。

■入会下さい。ネットで参加可能です。

◆入会するには◆

①会費1年分(12,000円)を下の振込先に振り込み

②〒住所・氏名(フリガナ)・生年月日・職業・電話・
メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673-0031 明石市宮の上1の17の614

大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は3,200円です。**

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先(郵便・当座)◆

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※会費以外に発表負担金などは不要です。

アクトス 第23号

第6巻第3号・通巻第27号

発行 平成二十六年八月一日

編集 大西亥一郎

発行所

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)800円